

南島原市文化財調査報告書 第18集

東大窪遺跡・中萩原遺跡

—市道堀切湯河内線道路改良工事に伴う発掘調査—

2019

長崎県南島原市教育委員会

南島原市文化財調査報告書 第18集

東大窪遺跡・中萩原遺跡

—市道堀切湯河内線道路改良工事に伴う発掘調査—

2019

長崎県南島原市教育委員会

発刊にあたって

本書は、市道堀切湯河内線の拡幅工事に伴い、南島原市教育委員会が平成30年度に実施した東大窪遺跡及び中萩原遺跡の発掘調査報告書です。

東大窪遺跡と中萩原遺跡は、雲仙山系からのびる扇状台地上の標高200mほどの場所に位置しており、周辺には有家川が流れています。

今回の調査では、東大窪遺跡から石斧を複数埋納した土坑が検出されています。また、両遺跡からは他にも縄文時代早期及び後・晩期の土器と石器、中萩原遺跡からは弥生時代の土器などが出土しています。

本書が、埋蔵文化財保護に対するよりよい理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査を実施するにあたり多大なご協力をいただきました関係各位、酷暑のなか発掘調査に従事していただいた関係の皆さまにお礼申し上げまして刊行のあいさつといたします。

令和元年12月31日

南島原市教育委員会
教育長 永田 良二

例 言

- 1 本書は、東大窪遺跡（長崎県南島原市有家町尾上所在）及び中萩原遺跡（同有家町尾上所在）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、南島原市が事業主体である市道堀切湯河内線道路改良工事に伴って実施した。
- 3 調査は、長崎県南島原市教育委員会が主体となって以下の期間で実施した。
試掘・範囲確認調査 平成28年4月20日～平成28年4月28日
東大窪遺跡本調査 平成30年5月22日～平成30年8月17日
中萩原遺跡本調査 平成30年5月25日～平成30年8月10日

- 4 現地調査及び本書作成にかかわる整理調査の体制と担当は、以下のとおりである。

調査体制

南島原市教育委員会	教 育 長	永田 良二
	教 育 次 長	渡部 博（～平成28年度）
	同 上	深松 良蔵（平成29年度～）
	理 事	宮崎 誠（平成31年度）
	文 化 財 課 課 長	松本 慎二
	文化財課文化財班 班 長	木村 岳士（～平成29年度）
	同 上	末永 透（平成30年度）
	同 上	鬼塚 俊範（平成31年度）

調査担当

試掘・範囲確認調査

南島原市教育委員会	文化財課文化財班	主 査（学芸員）	本多 和典
	同 上	文化財調査員	酒井 希望

本調査

南島原市教育委員会	文化財課文化財班	主事補（学芸員）	竹村 南洋
-----------	----------	----------	-------

整理調査

南島原市教育委員会	文化財課文化財班	副参事（学芸員）	本多 和典
	同 上	主 事（学芸員）	小川 慶晴
	同 上	主事補（学芸員）	竹村 南洋

- 5 試掘・範囲確認調査における写真撮影及び調査坑配置図の作成は、本多が行った。また、土層実測図の作成は、酒井が行った。
- 6 本調査における写真撮影及び個別遺構実測図の作成は、竹村が行った。また、遺構配置図及び土層実測図の作成と製図、航空写真撮影は、(株)埋蔵文化財サポートシステム長崎支店に委託した。
- 7 遺物の実測については、土器の実測は小川、本多が、土器の拓本は本多が行い、石器の実測は、(株)イビソク長崎支店に委託した。遺物の製図については、小川、本多が行った。
- 8 本書に関する遺物、図面、写真等は、南島原市深江埋蔵文化財整理室において保管している。
- 9 本書の執筆は、本多、小川、竹村で分担した。編集は、本多による。

目 次

第Ⅰ章 位置と環境（小川）	1
1 地理的環境	1
2 歴史的環境	1
第Ⅱ章 調査に至る経緯と過去の調査（本多）	3
1 調査に至る経緯	3
2 過去の調査	4
第Ⅲ章 試掘・範囲確認調査（本多）	6
1 調査坑の設定と調査の方法	6
2 調査の成果と本調査対象	6
第Ⅳ章 東大窪遺跡の本調査	12
1 調査の経過（竹村）	12
2 基本土層（竹村）	12
3 遺構（竹村）	13
(1) 概要	13
(2) IV層上面	13
(3) III層上面	13
4 包含層ほか出土の遺物（本多）	20
(1) 土器	20
(2) 石器	22
第Ⅴ章 中萩原遺跡の本調査	25
1 調査の経過（竹村）	25
2 基本土層（竹村）	26
3 遺構（竹村）	26
(1) 概要	26
(2) IV層上面	26
(3) III層上面	26
4 包含層出土の遺物（本多）	30
(1) 土器	30
(2) 石器	32
第Ⅵ章 まとめ（本多）	34

挿図目次

第1図	東大窪遺跡・中萩原遺跡位置図 (S = 1/200,000)	2
第2図	東大窪遺跡・中萩原遺跡周辺遺跡位置図 (S = 1/100,000)	2
第3図	計画路線図 (S = 1/25,000)	3
第4図	平成26・27年度東大窪遺跡調査地位置図 (S = 1/2,000)	4
第5図	東大窪遺跡土坑実測図及び土坑内出土遺物実測図	5
第6図	東大窪遺跡包含層ほか出土遺物実測図	5
第7図	試掘・範囲確認調査調査坑配置図 (S = 1/2,500)	7
第8図	試掘・範囲確認調査調査坑土層実測図 (S = 1/50)	8
第9図	試掘・範囲確認調査出土遺物実測図 (S = 1/3)	9
第10図	東大窪遺跡の範囲と本調査対象 (S = 1/1,000)	11
第11図	中萩原遺跡の範囲と本調査対象 (S = 1/1,000)	11
第12図	東大窪遺跡調査区画設定図 (S = 1/1,000)	12
第13図	東大窪遺跡土坑実測図 (S = 1/10)	13
第14図	東大窪遺跡土層実測図① (S = 1/100)	14
第15図	東大窪遺跡土層実測図② (S = 1/100)	15
第16図	東大窪遺跡IV層上面遺構配置図 (S = 1/200)	16
第17図	東大窪遺跡III層上面遺構配置図 (S = 1/200)	17
第18図	東大窪遺跡土坑内出土遺物実測図 (S = 1/3)	19
第19図	東大窪遺跡包含層ほか出土土器実測図① (S = 1/3)	20
第20図	東大窪遺跡包含層ほか出土土器実測図② (S = 1/3)	21
第21図	東大窪遺跡包含層出土石器実測図① (1・2 : S = 1/2, 3・4 : S = 2/3, 5・6 : S = 1/3)	22
第22図	東大窪遺跡包含層出土石器実測図② (S = 1/3)	23
第23図	中萩原遺跡調査区画設定図 (S = 1/1,000)	25
第24図	中萩原遺跡土層実測図 (S = 1/100)	27
第25図	中萩原遺跡IV層上面遺構配置図 (S = 1/200)	28
第26図	中萩原遺跡III層上面遺構配置図 (S = 1/200)	29
第27図	中萩原遺跡包含層出土土器実測図 (S = 1/3)	30
第28図	中萩原遺跡包含層出土石器実測図① (1～3 : S = 2/3, 4・5 : S = 1/3)	32
第29図	中萩原遺跡包含層出土石器実測図② (S = 1/3)	33
第30図	東大窪遺跡土器構成比率 (層位別)	35
第31図	東大窪遺跡土器構成比率 (時期別)	35
第32図	中萩原遺跡土器構成比率 (層位別)	35
第33図	中萩原遺跡土器構成比率 (時期別)	35
第34図	東大窪遺跡・中萩原遺跡出土遺物分布 (S = 1/500)	36
第35図	東大窪遺跡出土遺物分布 (S = 1/500)	37
第36図	中萩原遺跡出土遺物分布 (S = 1/500)	38

表 目 次

第1表	試掘・範囲確認調査出土土器観察表	10
第2表	試掘・範囲確認調査出土石器観察表	10
第3表	東大窪遺跡土坑内出土遺物観察表	19
第4表	東大窪遺跡包含層ほか出土土器観察表	21
第5表	東大窪遺跡包含層出土石器観察表	24
第6表	中萩原遺跡包含層出土土器観察表	31
第7表	中萩原遺跡包含層出土石器観察表	33
第8表	東大窪遺跡出土遺物集計	35
第9表	東大窪遺跡土器内訳	35
第10表	東大窪遺跡石器石材別内訳	35
第11表	中萩原遺跡出土遺物集計	35
第12表	中萩原遺跡土器内訳	35
第13表	中萩原遺跡石器石材別内訳	35

図 版 目 次

図版1	東大窪遺跡・中萩原遺跡航空写真	41
図版2	試掘・範囲確認調査調査抗土層	42
図版3	試掘・範囲確認調査調査状況	43
図版4	試掘・範囲確認調査出土遺物①	44
図版5	試掘・範囲確認調査出土遺物②	45
図版6	東大窪遺跡調査区全景	46
図版7	東大窪遺跡調査状況①	47
図版8	東大窪遺跡調査状況②	48
図版9	東大窪遺跡土坑検出状況	49
図版10	東大窪遺跡土坑内出土遺物	50
図版11	東大窪遺跡出土遺物①	51
図版12	東大窪遺跡出土遺物②	52
図版13	東大窪遺跡出土遺物③	53
図版14	中萩原遺跡調査区全景	54
図版15	中萩原遺跡調査状況①	55
図版16	中萩原遺跡調査状況②	56
図版17	中萩原遺跡出土遺物①	57
図版18	中萩原遺跡出土遺物②	58
図版19	中萩原遺跡出土遺物③	59

第 I 章 位置と環境

1 地理的環境

長崎県南東部に位置する島原半島は、県央地域から南につきだす胃袋状の半島である。半島中央には、平成新山 (1,483m)、普賢岳 (1,359m)、国見岳 (1,347m)、妙見岳 (1,333m)、高岩山 (881m) といった雲仙山系の山々が連なる。半島南西部域を除く殆どの地域は、これら雲仙火山群の噴出による堆積物によって構成され、海岸部まで火山麓扇状地を形成する。

南島原市は、島原半島の南東部に位置している。平成18年に深江町・布津町・有家町・西有家町・北有馬町・南有馬町・口之津町・加津佐町の8町が合併して誕生した。市の北部は島原市と、西部は雲仙市と接しており、沿岸部は主に有明海(島原湾)に面する。面積は170.11km²、人口は46,131人(平成30年12月)である。

東大窪遺跡・中萩原遺跡は、有家町の標高200~260m程度の扇状台地上に位置し、両遺跡は南北に隣接する位置関係である。周辺の地形は、遺跡北部に広がる雲仙火山から南東の沿岸部に向けて緩やかに下る火山山麓地となる。両遺跡の位置する台地は、西側の有家川と東側の蒲河川の2本の河川に挟まれている。遺跡周辺の土地は、主に田畑や山林であり、果樹栽培や植林等が行われている。

2 歴史的環境

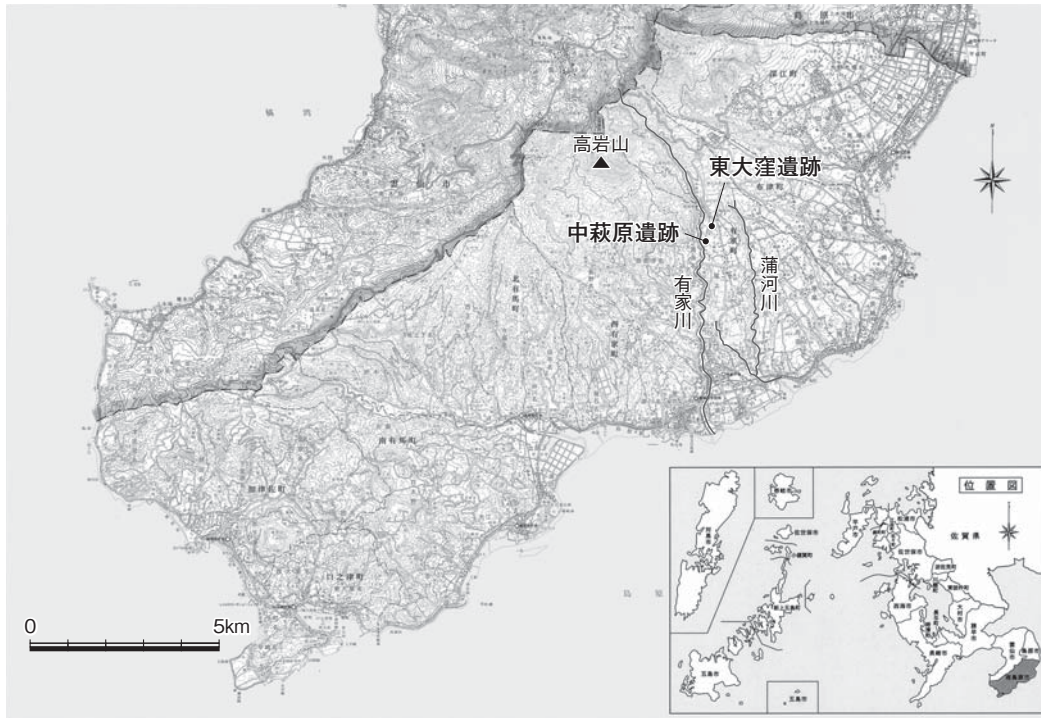
南島原市内には、現在約190の遺跡が所在している。丘陵や台地が発達している市中央部に多くの遺跡が集中しており、特に縄文時代後・晩期や、弥生時代中・後期の遺跡が大半を占める。ここでは有家町内における縄文時代・弥生時代の遺跡について述べる。

縄文時代の遺跡としては、東大窪遺跡、大苑遺跡、宮野遺跡、西鬼塚石棺群、堂崎遺跡、蒲河遺跡がある。本書で報告する東大窪遺跡は、平成27年度に南島原市教育委員会において本調査が実施され、縄文時代早期や縄文時代後・晩期の土器・石器が出土している。大苑遺跡、宮野遺跡は、標高25~50m程度の丘陵緩斜面上に広がる遺跡である。大苑遺跡では、縄文時代晩期の土器や土坑が確認され、宮野遺跡では、縄文時代早期、縄文時代後期~突帯文期の土器・石器が確認されている。縄文時代晩期を主体とする西鬼塚石棺群では、支石墓と箱式石棺墓が確認されており、一部はマリパーク有家内に移設復元されている。堂崎遺跡、蒲河遺跡は、どちらも有明海沿岸に位置する潮間帯遺跡であり、港湾関係事業に係る調査が長崎県文化課によって実施されている。縄文時代晩期土器の他、多くの礫器、石錘等の出土があり、漁労活動の場として考えられている。

弥生時代の遺跡としては、大苑遺跡、宮野遺跡、堤遺跡、貝森遺跡が挙げられる。大苑遺跡では、弥生時代中期の土器が出土しており、同時期の小児用甕棺墓が検出されている。宮野遺跡では、弥生時代中・後期の土器が確認されている。有家川下流域に位置する堤遺跡では、弥生時代中・後期の合口甕棺墓等が確認されており、海中干潟に位置する貝森遺跡では、弥生時代後期の土器が出土している。

[参考文献]

- 有家町郷土誌編纂委員会編 1981 『有家町郷土誌』 有家町
- 本多和典・酒井希望 2018 『東大窪遺跡』南島原市文化財調査報告書第11集 南島原市教育委員会
- 本多和典編 2018 『大苑遺跡』南島原市文化財調査報告書第12集 南島原市教育委員会
- 本多和典編 2018 『宮野遺跡』南島原市文化財調査報告書第13集 南島原市教育委員会



第 1 図 東大窪遺跡・中萩原遺跡位置図 (S = 1/200, 000)



第 2 図 東大窪遺跡・中萩原遺跡周辺遺跡位置図 (S = 1/100, 000)

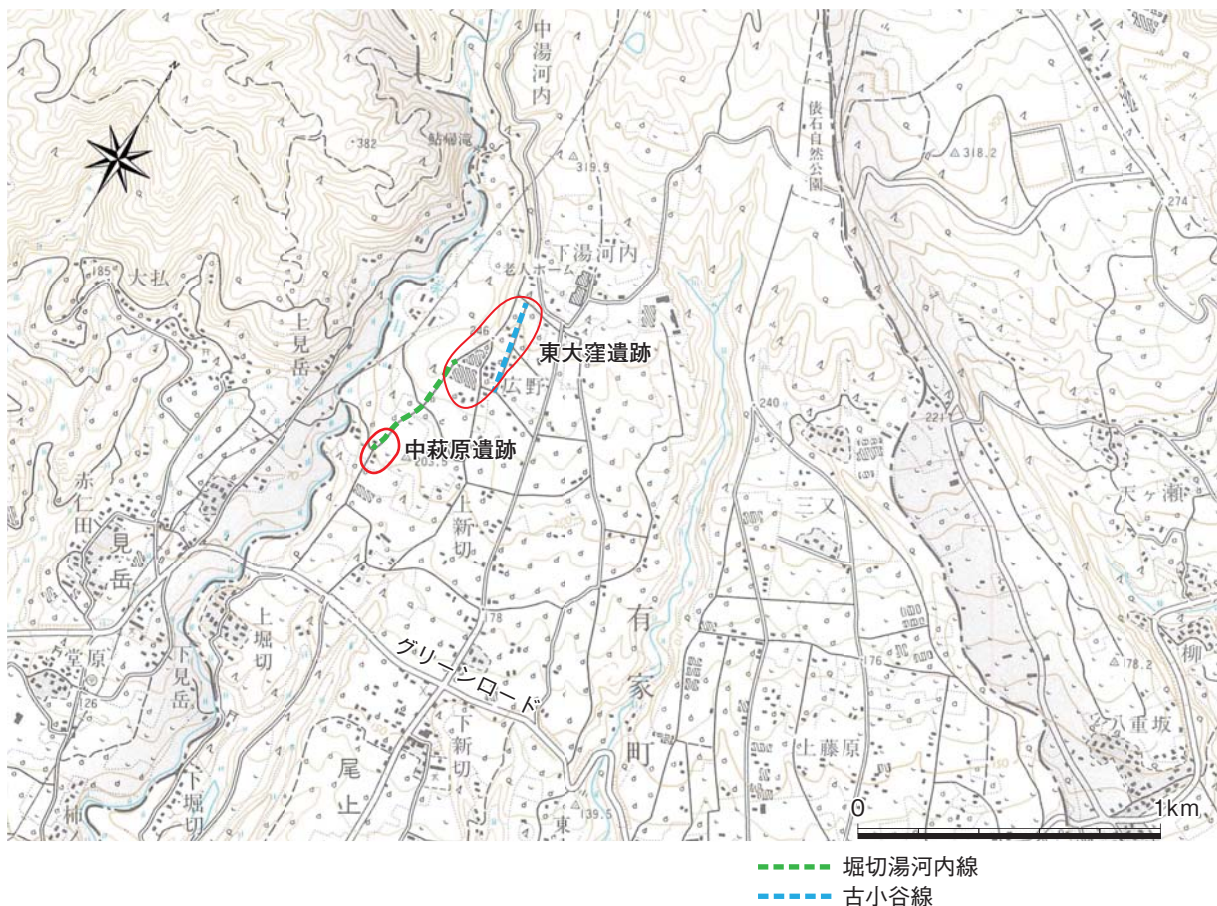
第Ⅱ章 調査に至る経緯と過去の調査

1 調査に至る経緯

南島原市建設部建設課により市道堀切湯河内線道路改良工事が計画された。工事の計画は、南島原市有家町尾上において、既存道路の拡幅を行うものであった。

南島原市には、島原半島を海岸線沿いに1周する国道251号線と、島原市と雲仙温泉とをつなぐ国道57号線の、2本の国道が通っており、その両路線間には等高線に沿うように広域農道(グリーンロード)が走って、農業用幹線道路として機能している。市道堀切湯河内線は、この広域農道から山手へと伸びる生活道路である。

事業の計画を受け、路線が東大窪遺跡及び中萩原遺跡の範囲内を通過すること、また東大窪遺跡においては、平成27年度に市道古小谷線道路改良工事に伴う本調査を実施しており、多くの遺物が出土するなどして遺跡の広がりが見込まれること、遺跡隣接地においても遺物の表面採集が可能であることから、東大窪遺跡及び中萩原遺跡の内外において、試掘・範囲確認調査を実施する運びとなった。



第3図 計画路線図 (S=1/25,000)

2 過去の調査

今回、本調査を実施した東大窪遺跡及び中萩原遺跡のうち東大窪遺跡については、過去に発掘調査の履歴がある。今回同様に道路改良事業を調査原因としており、市道古小谷線道路改良工事に伴っての事前調査として、平成26年度に範囲確認調査を、平成27年度に本調査を南島原市教育委員会が調査主体となって実施している。

調査地点は、道路の拡幅工事ということで、全長が南北約150m、幅2m程度と傾斜方向に細長い調査区で、358㎡の本調査であった。

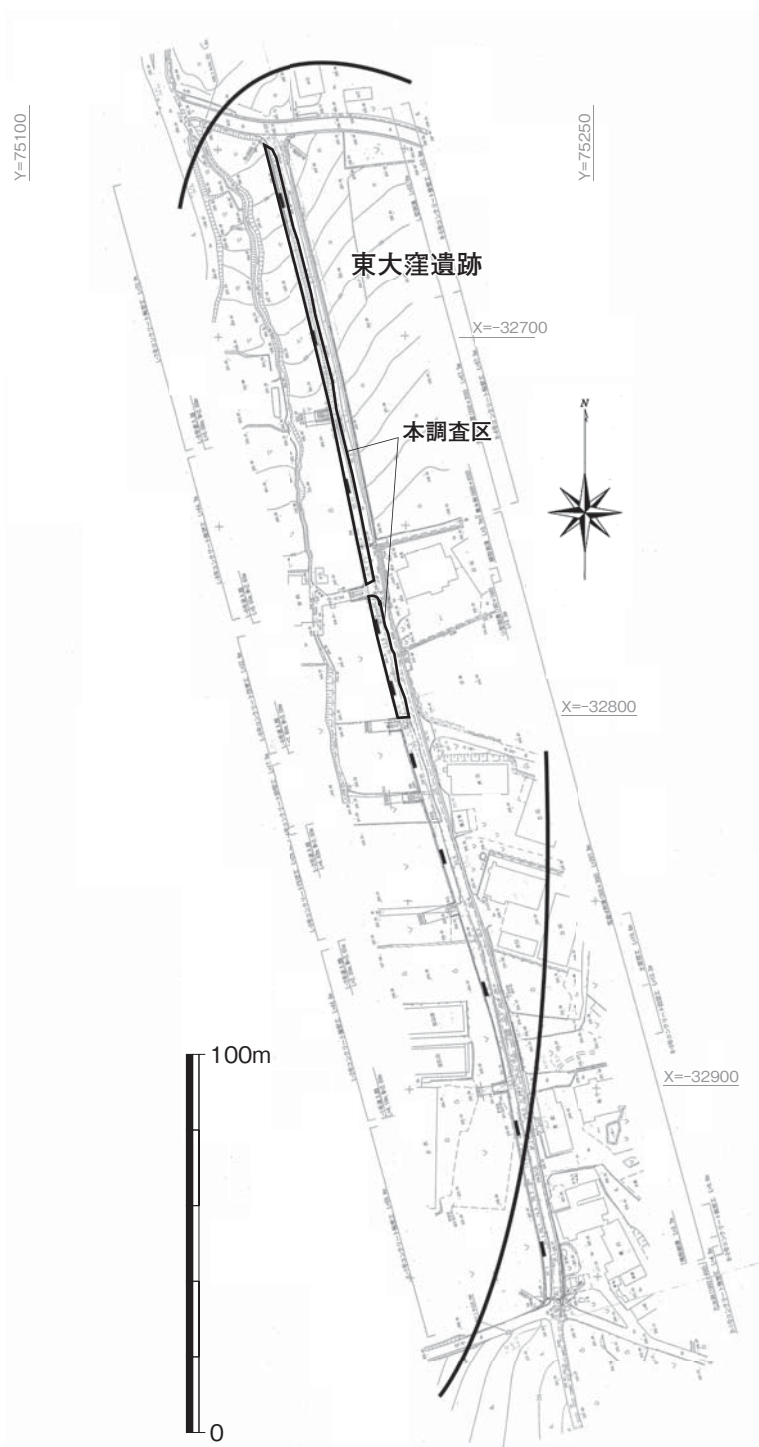
遺構としては、縄文時代後期の土坑1基（第5図）を検出している。土坑からは縄文時代後期に位置づけられる、文様帯に横位の凹線や沈線をもつ深鉢口縁部、屈曲部直上に段をもつ深鉢胴部、わずかに上げ底となる深鉢底部、大きく頸部が開いて口縁部文様帯に2条の沈線を引く浅鉢などがある。また、石器として磨製石斧、円盤状石器の出土が見られる。

包含層などからの出土遺物は、縄文時代早期のものと縄文時代後・晩期のものに大別され、前者がⅢ層より、後者がⅡ層より出土する傾向にある。早期の資料（第

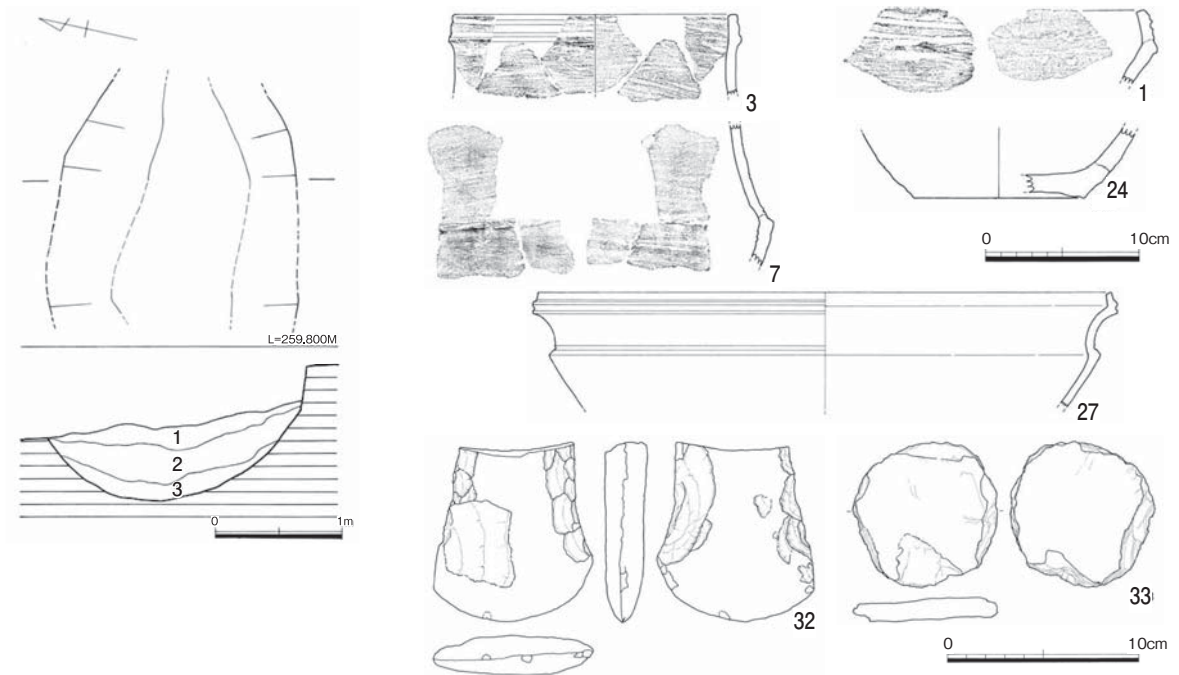
6図1, 4, 7・8）は塞ノ神式に、後・晩期の資料（第6図31, 33, 35, 49）は肥後地方でいうところの御領式、天城式に相当する資料である。

[参考文献]

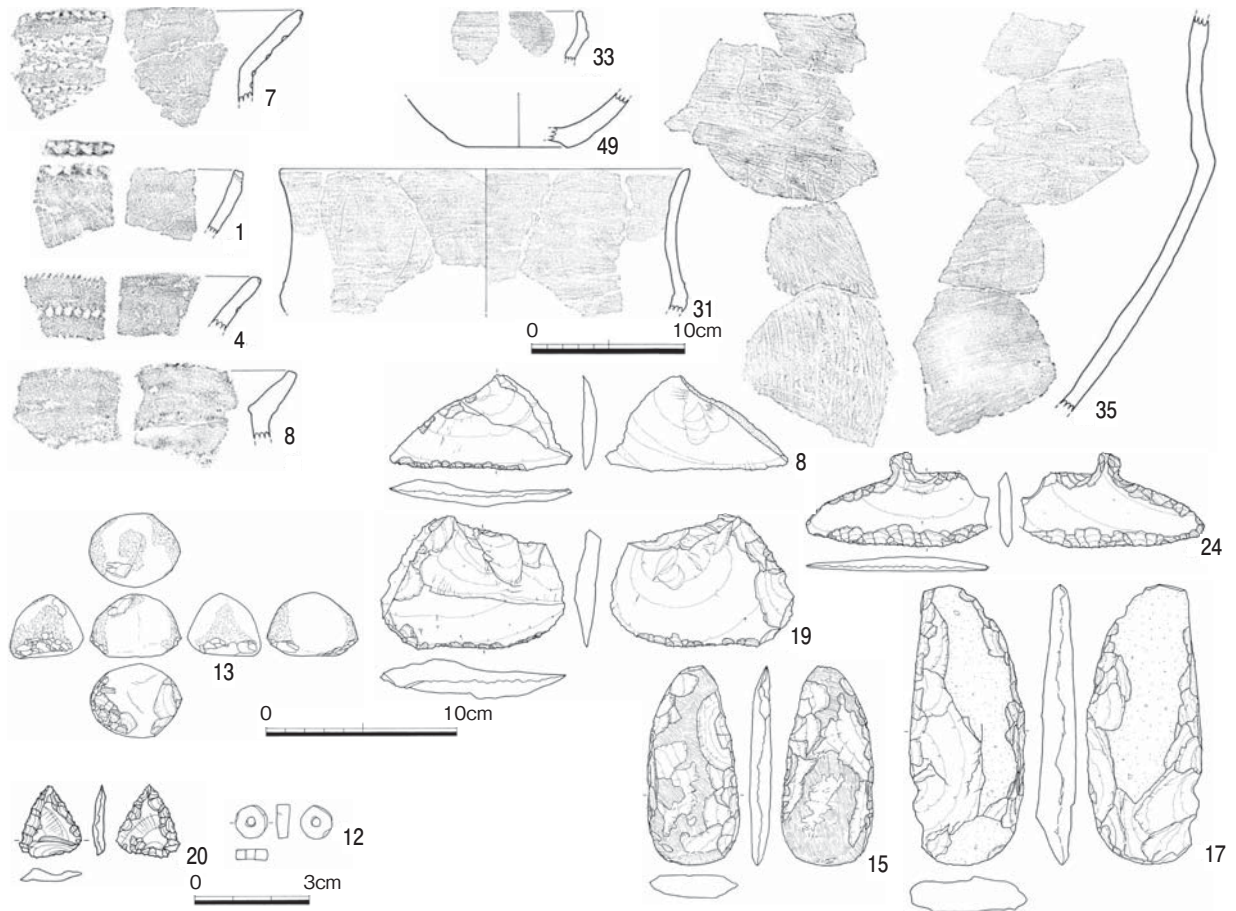
本多和典・酒井希望 2018 『東大窪遺跡』南島原市文化財調査報告書第11集 南島原市教育委員会



第4図 平成26・27年度東大窪遺跡調査地位置図 (S=1/2,000)



第5図 東大窪遺跡土坑実測図及び土坑内出土遺物実測図



第6図 東大窪遺跡包含層ほか出土遺物実測図

第Ⅲ章 試掘・範囲確認調査

1 調査坑の設定と調査の方法

事業予定地内において、2m×2mもしくは4m×1mの調査坑を全部で7カ所設定した。事業の計画地は、既設道路の改良に伴う沿線の拡幅であったため、多くは道路境界となる石垣とその裏込めによって遺跡の残存はあまり望めない状況であったが、部分的に拡幅幅の広いところを対象として、調査坑の設定を行った。路線沿線の調査坑の設定地は、東大窪遺跡及びその隣接地では山林、中萩原遺跡及びその隣接地は畑地であった。

掘削作業は人力によって層位ごとに行い、各層において遺物の確認を行うとともに、各層上面においては遺構の有無について確認を行った。Ⅵ層もしくはⅦ層までの掘削を基本とし、完掘状況で壁面の土層実測図の作成と写真撮影を行った。また、Ⅳ層上面において遺構の確認されたTP. 5については、遺構の検出状況及び完掘状況について写真撮影を行い、遺構実測図の作成を行った。

2 調査の成果と本調査対象

試掘・範囲確認調査における基本土層は、以下のとおりである。

- I層 灰黄褐色土。表土。
- II層 黒褐色土。(縄文時代後・晩期遺物包含層)
- III層 にぶい黄褐色土。(縄文時代早期遺物包含層)
- IV層 黒褐色土。
- V層 黒褐色土。
- VI層 黄橙色土。
- VII層 固結した土石流堆積物。

TP. 1～TP. 7の7カ所の調査坑のうち、TP. 1, TP. 2, TP. 5においてII層及びIII層を主体に多数の遺物の出土が見られた。また、遺構としてはTP. 5のIV層上面においてピットの検出があった。

各調査坑における出土遺物は、第9図に示すとおりである。

1～7はTP. 1出土の土器である。1～6は縄文時代早期の資料である。1・2は屈曲して外傾し、断面は先細りとなる口縁部で、外面にはどちらも3条の列点文を施し、口唇部外端には刻目を施す。3は口縁部へと接続する胴部最上位の資料で、列点文を入れる。4～6は胴部の資料で、沈線の区画内を撚糸文で充填する。7は縄文時代晩期の深鉢口縁部で、外面には貝殻条痕調整が残る。

8～12はTP. 2出土の資料で、いずれも縄文時代早期に属するものである。8は内湾気味に外傾する口縁部で、外面には沈線と列点、口唇部外端には刻目を施す。9は屈曲して内傾する口縁部の資料で、2条ないし3条単位の沈線を引き、口唇部外端に刻目を施す。10は縦方向のベルト状の撚糸文が認められる。11は沈線の区画内を撚糸文で充填する。12は多条の平行する沈線文を引く。

13～18はTP. 5の出土資料である。いずれも縄文時代後・晩期のものである。13～15は間隔の広い平行沈線を引く深鉢の資料である。16は外面に浅い段を有し、段より上位は貝殻条痕調整を明瞭に残す。17は深鉢胴部の資料であるが、外面は丁寧なナデ調整を施しており、13～16よりはやや古い時

期の資料の可能性はある。18は扁球状の胴部をもつとみられる黒色磨研浅鉢で、玉縁状をなす口縁部の外面には1条の沈線を引く。

19～21はTP. 5周辺の耕作地からの表面採集資料であり、縄文時代晩期のものである。19は深鉢の口縁部で、垂下する沈線とそこから派生する弧状の沈線が認められる。20・21は深鉢底部の資料である。21は断面しっかりとした張り出しをもち、底面には擦過調整を残す。

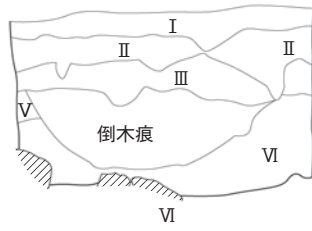
22は板状をなす結晶片岩片である。器種については、特定できない。23はサヌカイト製のスクレイパーである。自然面を打点として作出した大型で比較的薄手の剥片素材に対し、片方の側辺から末端にかけて連続的に刃部形成の調整加工を行っている。24は砂岩製の砥石で、破片資料ではあるが表裏両面に研磨面を有する。

以上の結果をふまえ、市道堀切湯河内線道路改良工事に伴う埋蔵文化財の取り扱いについては、第10・11図に示すとおり、東大窪遺跡と中萩原遺跡の両遺跡においてそれぞれ遺跡範囲の拡張と本調査の実施が必要と判断した。

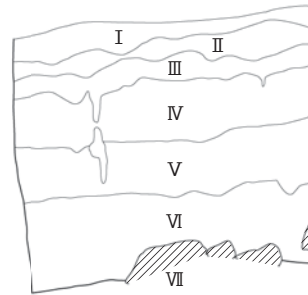


第7図 試掘・範囲確認調査調査坑配置図 (S=1/2, 500)

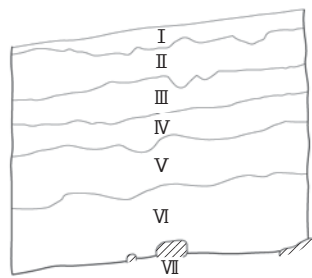
TP.1 西壁 L=230.8m



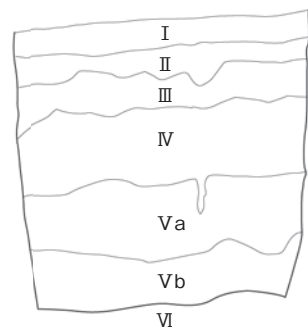
TP.2 西壁 L=227.0m



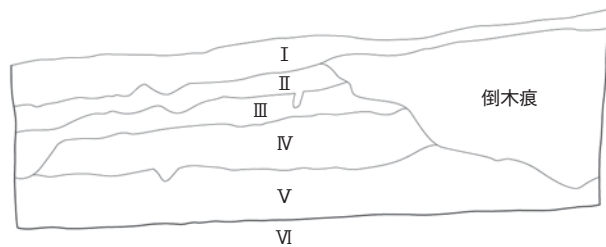
TP.3 西壁 L=223.5m



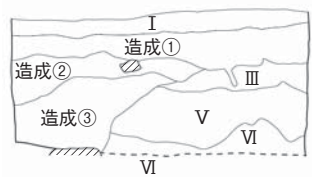
TP.5 西壁 L=210.5m



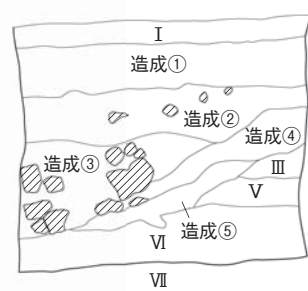
TP.4 西壁 L=220.5m



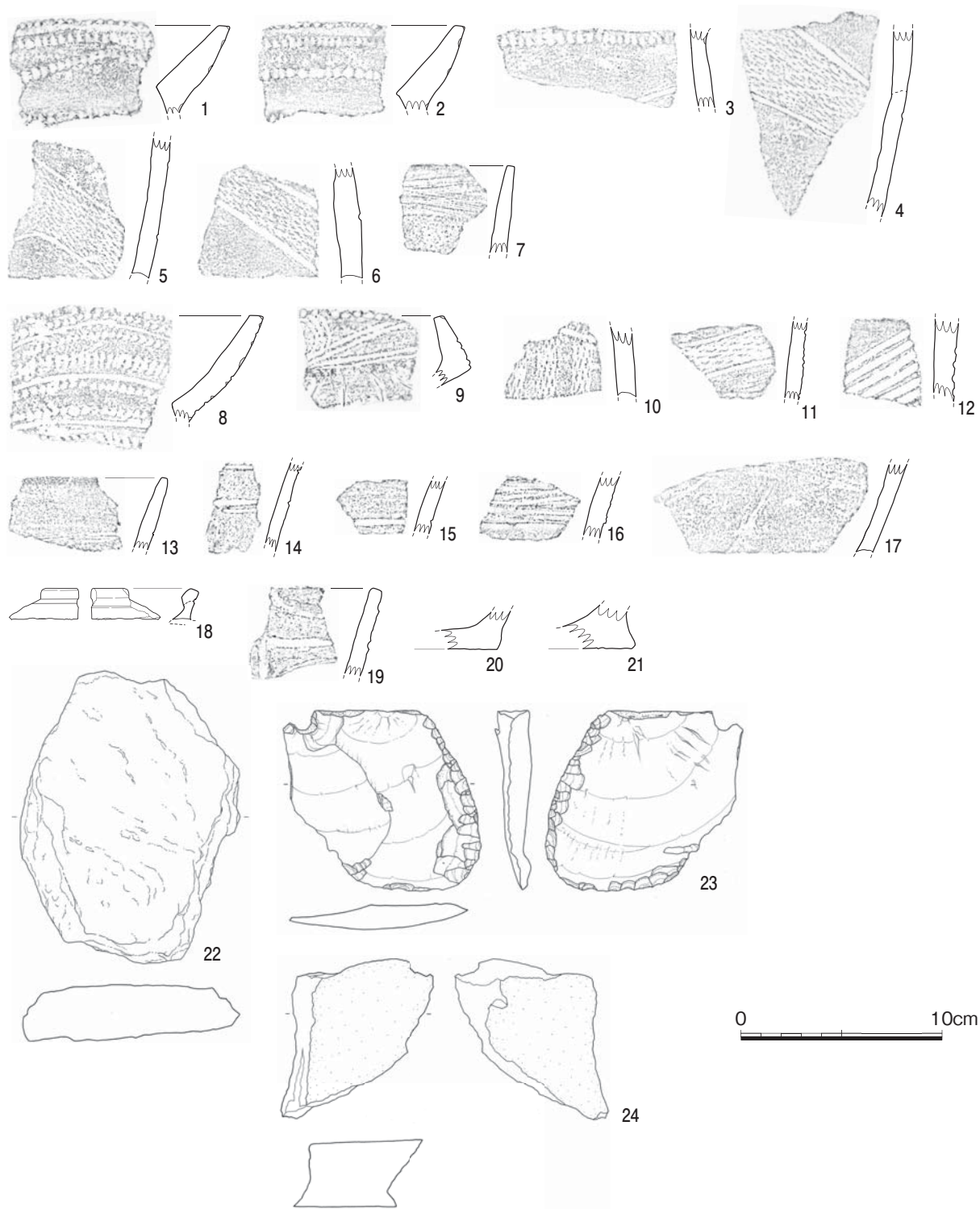
TP.6 西壁 L=203.3m



TP.7 西壁 L=202.2m



第 8 図 試掘・範囲確認調査調査坑土層実測図 (S=1/50)



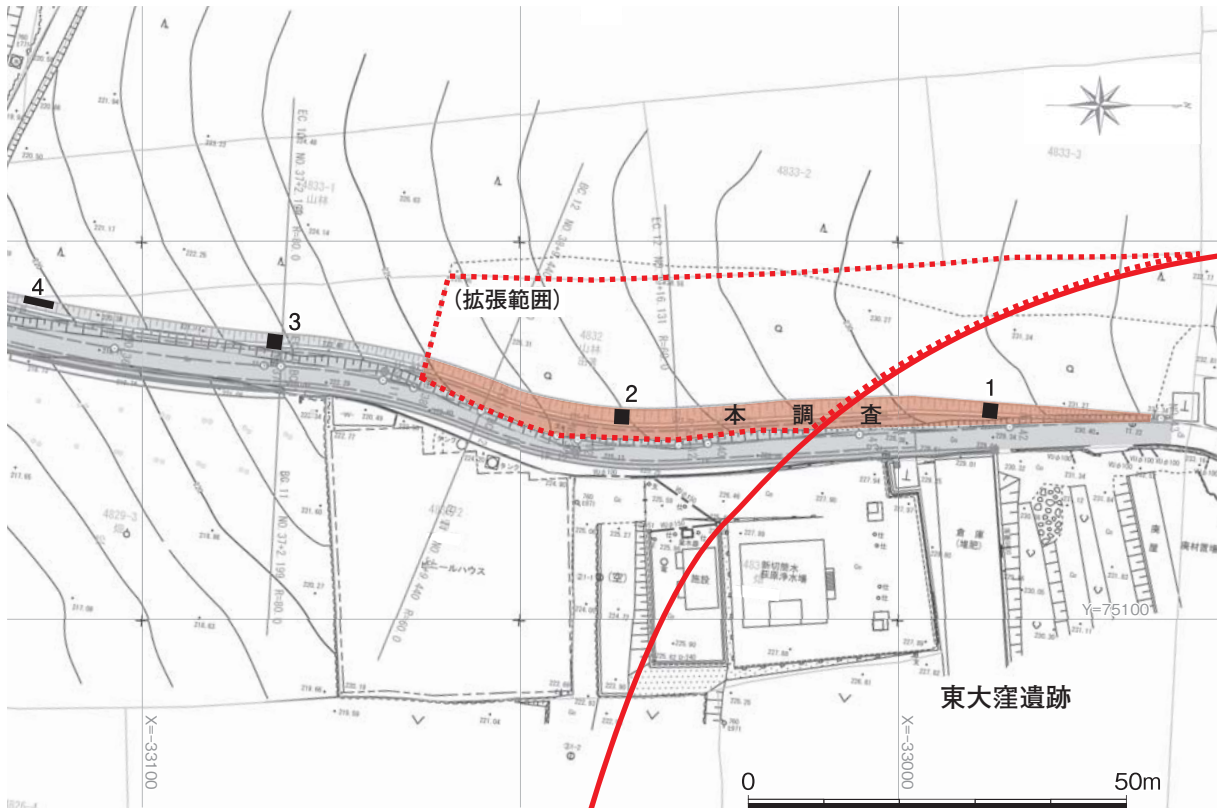
第9図 試掘・範囲確認調査出土遺物実測図 (S=1/3)

第1表 試掘・範囲確認調査出土土器観察表

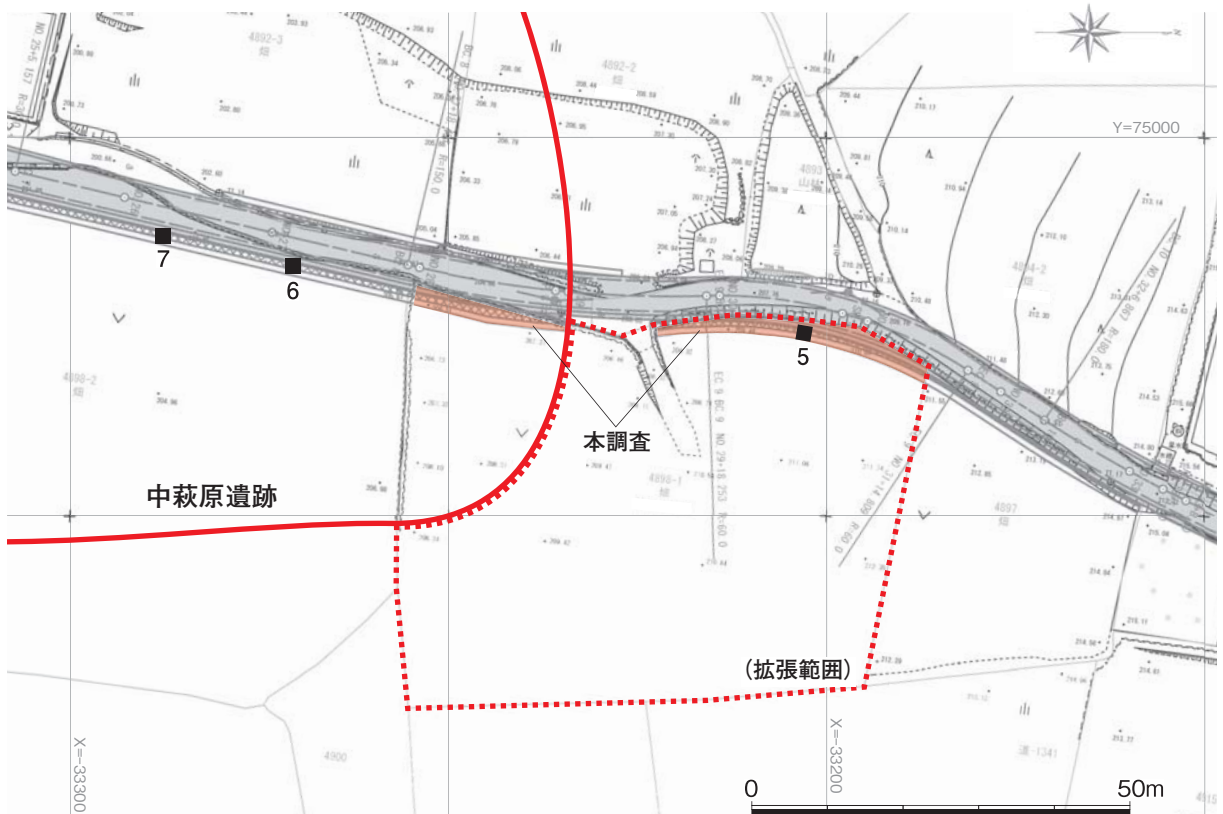
図	番号	器種	調査坑	層位	文様・調整		色調		胎土	備考
					外面	内面	外面	内面		
9	1	深鉢	TP.1	Ⅲ	列点	ナデ	橙色	橙色	長石・石英・赤色粒子	口唇部に刻目
	2	深鉢	TP.1	Ⅲ	列点	ナデ	褐色	明褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	口唇部に刻目
	3	深鉢	TP.1	Ⅲ	列点, 沈線	ナデ	橙色	明赤褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	4	深鉢	TP.1	Ⅱ	区画捺糸文	ナデ	明赤褐色	橙色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	5	深鉢	TP.1	Ⅲ	区画捺糸文	ナデ	橙色	橙色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	6	深鉢	TP.1	Ⅱ	区画捺糸文	ナデ	褐色	橙色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	7	深鉢	TP.1	Ⅱ	条痕・ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・赤色粒子	
	8	深鉢	TP.2	Ⅲ	列点・沈線	ナデ	赤褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	口唇部に刻目
	9	深鉢	TP.2	Ⅲ	沈線文	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石	口唇部に刻目
	10	深鉢	TP.2	Ⅲ	捺糸文	ナデ	明黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英	
	11	深鉢	TP.2	Ⅲ	区画捺糸文	ナデ	褐色	黒褐色	角閃石・長石・石英	
	12	深鉢	TP.2	Ⅲ	沈線	ナデ	にぶい黄褐色	浅黄橙	角閃石・長石	
	13	深鉢	TP.5	Ⅲ	ナデ	ナデ	明赤褐色	にぶい赤褐色	角閃石・長石・石英	
	14	深鉢	TP.5	Ⅲ	ナデ, 沈線	ナデ	明赤褐色	にぶい橙色	角閃石・長石・石英	
	15	深鉢	TP.5	Ⅱ	ナデ, 沈線	ナデ	明赤褐色	橙色	角閃石・長石・石英	
	16	深鉢	TP.5	Ⅲ	貝殻条痕	ナデ	灰黄褐色	橙色	角閃石・長石・石英	
	17	深鉢	TP.5	Ⅲ	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	18	浅鉢	TP.5	Ⅱ	研磨, 沈線	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・赤色粒子	
	19	深鉢	—	表採	ナデ, 沈線	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい橙色	角閃石・長石・赤色粒子	
	20	深鉢	—	表採	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	
	21	深鉢	—	表採	ナデ	ナデ	にぶい橙色	灰褐色	角閃石・長石	

第2表 試掘・範囲確認調査出土石器観察表

図	番号	器種	石材	調査坑	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
9	22	不明	結晶片岩	TP.2	Ⅱ	14.6	10.8	2.8	525.2
	23	スクレイパー	サヌカイト	TP.3	Ⅲ	8.9	9.8	1.3	122.3
	24	砥石	砂岩	TP.5	Ⅲ	7.9	7.6	3.3	199.5



第10図 東大窪遺跡の範囲と本調査対象 (S=1/1,000)



第11図 中萩原遺跡の範囲と本調査対象 (S=1/1,000)

第Ⅳ章 東大窪遺跡の本調査

1 調査の経過

調査は、東大窪遺跡から南に約150m離れた位置にある中萩原遺跡での本調査と並行して実施した。調査範囲は、長さ約96m、最大幅約7m、面積約432㎡の区域である。

本調査対象地の調査前の状況は山林であった。調査にあたっては、工事主体である市建設課の協力のもと、まず調査区周辺の樹木の伐採を行い作業スペース等の確保を図った。

調査区の設定では、調査区全体を北から南へ8m間隔で区切る大区画を設定し、さらに各大区画を4mごとに二分した小区画を設定した。大区画の名称は、平成27年度に東大窪遺跡において実施した本調査の大区画の延長上の数字を付し、小区画は北側を「N」、南側を「S」とした。

掘削作業は、表土はぎを含め全ての工程を人力で行った。遺物の取り上げは、Ⅱ層とⅢ層以外から出土したものは小区画ごとに取り上げ、遺物が多く含まれるⅡ層とⅢ層から出土したものは出土地点の記録を行った。遺構は、Ⅲ層上面とⅣ層上面にて検出・掘削作業を行い、遺構配置図を作成した。遺構の掘削にあたっては、原則的に全て半裁し、形状と深度等を確認したのちに全体を掘削した。遺構内から出土した遺物は、遺構ごとに取り上げた。

土層は、調査区の北壁、西壁、南壁及び調査区内に16mおきに設けた土層観察用ベルトの堆積状況を土層実測図として記録した。なお調査区西壁は、3か所で屈曲しているためa～dの4つに分割し、図化した。作業状況や遺構・遺物の検出状況は随時写真撮影による記録を行い、完掘した段階でラジコンヘリによる航空写真撮影を実施した。

調査完了後は、道路工事の着工が控えていたため埋め戻し作業は行わずに工事主体者への現地引き渡しを行った。

2 基本土層 (第14図・第15図)

今回の調査における基本土層は次のとおりである。

I層 極暗赤褐色土 (Hue5YR2/4)。表土。

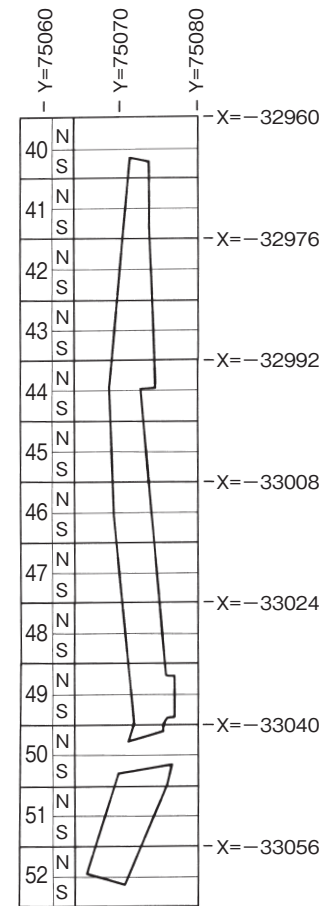
Ⅱ層 黒色土 (Hue10YR1.7/1)。縄文時代晚期遺物を多く含む。

Ⅲ層 褐色土 (Hue7.5YR4/4)。縄文時代早期遺物を多く含む。

Ⅳ層 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)。

V層 黄褐色土 (Hue2.5YR5/6)。

層位は、範囲確認調査で見られた基本層序を概ね踏襲する。なおⅣ層以下は範囲確認調査におけるTP. 1とTP. 2の壁面で検出した。調査区は、北から南に向かって緩やかに傾斜しており、北端と南端の高低差は約7mである。遺物が多く確認されたのはⅡ層とⅢ層で、Ⅱ層では縄文時代後・晩期の遺物が、Ⅲ層では塞ノ神式土器を主体とする縄文時代早期の遺物が多くみられた。



第12図 東大窪遺跡調査区画設定図 (S=1/1,000)

3 遺構

(1) 概要

今回の調査では、Ⅳ層上面とⅢ層上面で遺構検出を行い、Ⅳ層上面では4基のピットと1基の倒木痕を、Ⅲ層上面では5基のピットと1基の土坑を確認した。

現代の攪乱についてまとめると、調査区全体で市道と接する東側が削平をうけ法面を形成しており、とくに42-N区周辺では市道と並行する石垣の根石が検出された。この石垣は比較的近年になって築造されたものと思われる。また49-N区と49-S区にまたがる位置では断面が逆台形状の攪乱を検出した。

(2) Ⅳ層上面 (第16図)

調査区内全体をとおして明確な掘り込みを有する遺構は少なく、大半が不定形で深さが浅い植物の根穴であった。調査区内で確認できたピットは5基あり、44-N区で2基、他は48-S区、49-S区、50-S区で1基ずつ検出した。また、わずかながら遺構及び根穴の埋土から出土した遺物もあるが、いずれも細片のため図化に至っていない。43-N区と43-S区の境ではTP. 1に一部重なる形で倒木痕を検出した。

(3) Ⅲ層上面 (第17図)

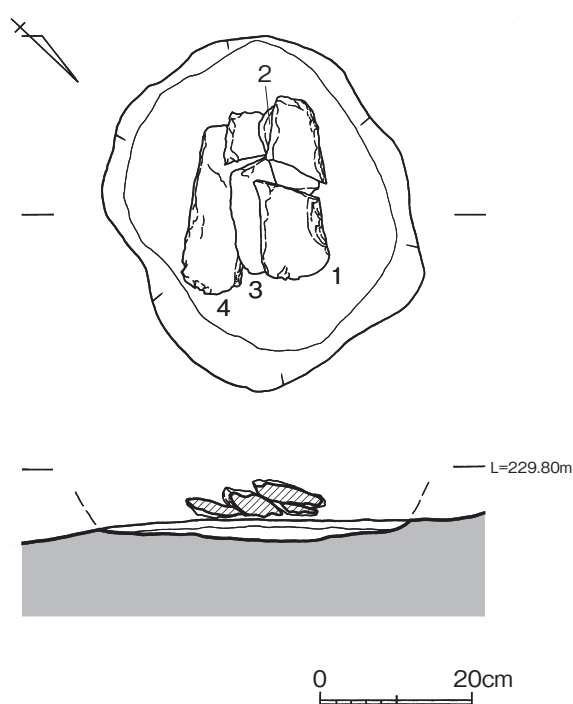
Ⅳ層上面と同様に、明確な遺構は少なく大半が植物の根穴であった。ピットは4基確認しており、うち3基は45-N区で検出、残りの1基は52-N区で検出した。また、44-N区では石斧が埋納された土坑を検出した。遺構及び根穴から出土した遺物も数点あるがいずれも細片であり、前述の土坑内から出土した石斧を除いて図化に至っていない。

土坑 (第13図)

44-N区で検出された土坑である。検出が遅れたため遺構の上部は消滅した可能性がある。実際には深さはもう少し深く、少なくとも石斧の最高点部分と同じレベルから掘り込みが始まっていたと思われる。検出時点での法量は、南北43cm、東西40cm、深さ3cmを測る。

土坑内にはほぼ完形の打製石斧4本が長軸方向を揃えるように重ねて埋納されており、そのうち2本は2つに割れていた。

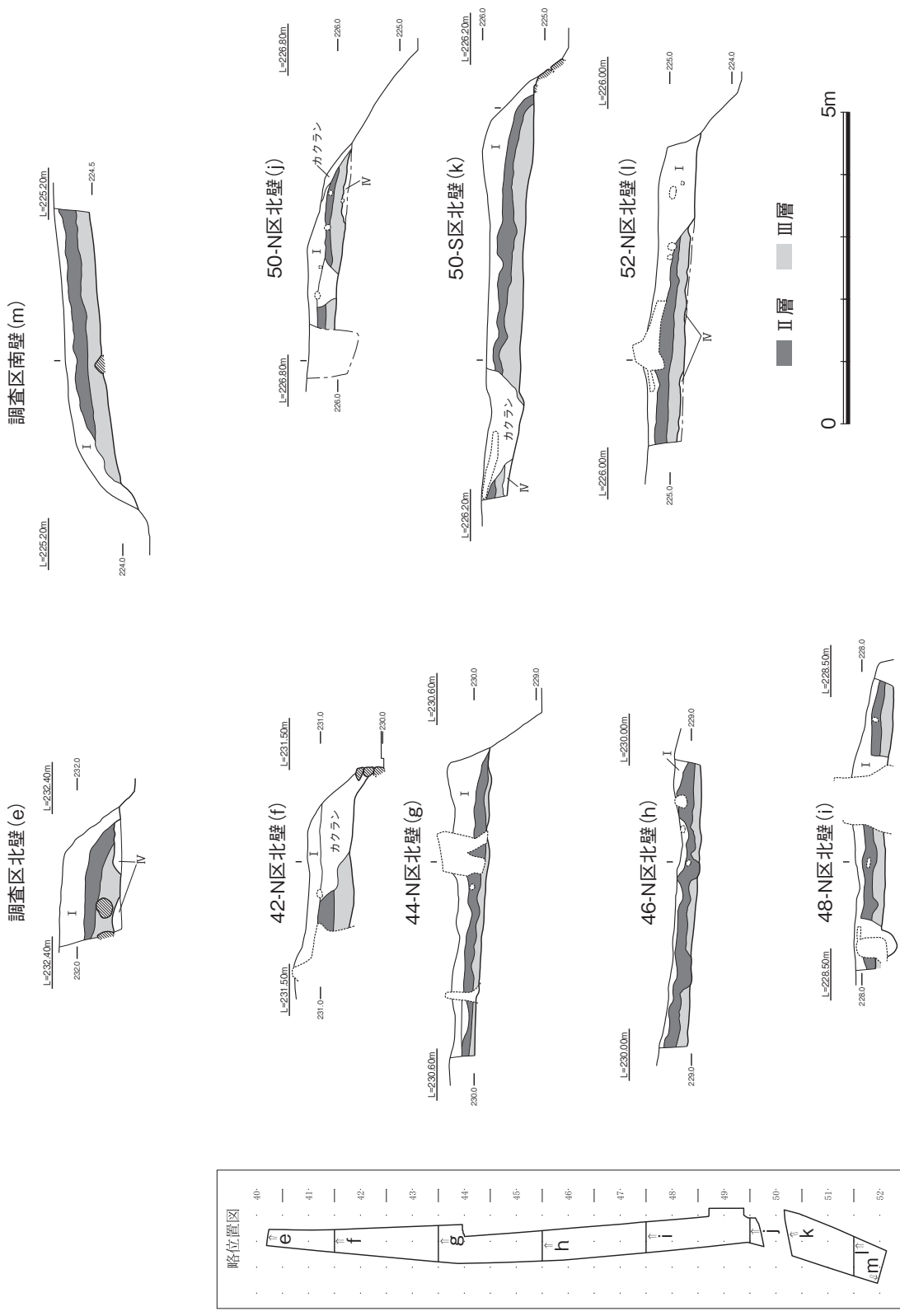
石斧には上から順に1～4の番号を付した。



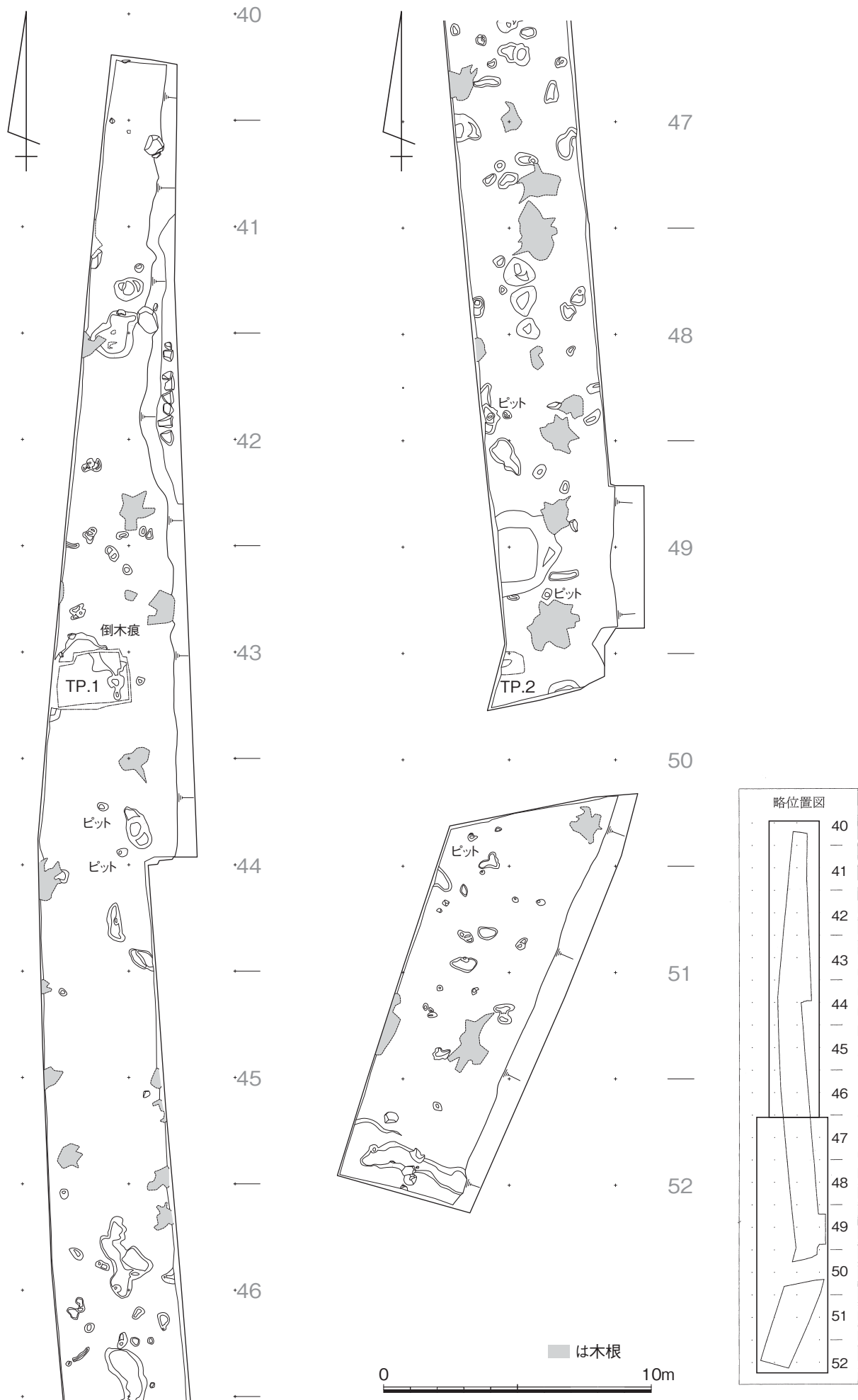
第13図 東大窪遺跡土坑実測図 (S=1/10)



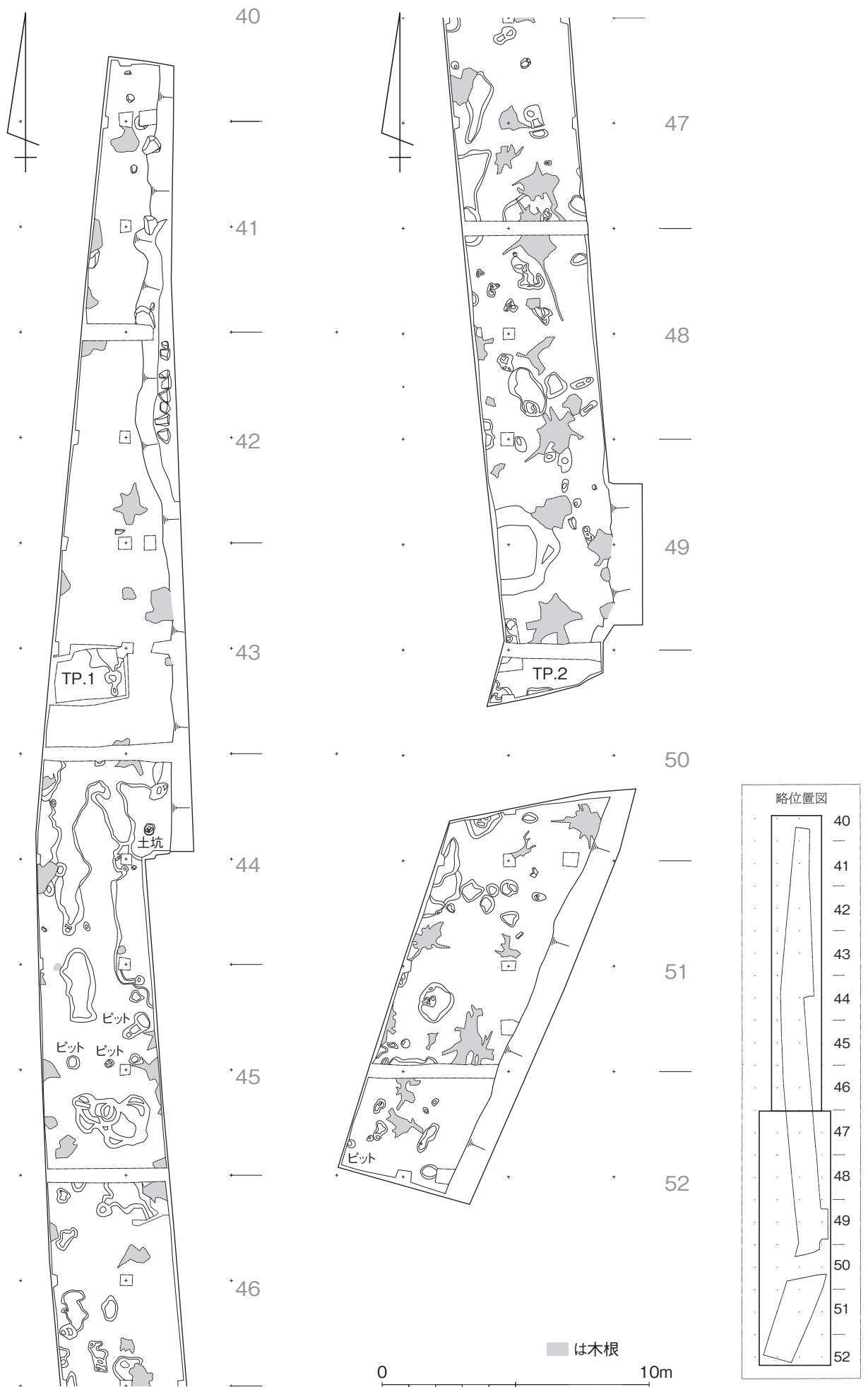
第14図 東大塚遺跡土層実測図① (S=1/100)



第15図 東大窪遺跡土層実測図② (S = 1 / 100)



第16図 東大窪遺跡IV層上面遺構配置図 (S=1/200)



第17図 東大窪遺跡Ⅲ層上面遺構配置図 (S=1/200)

土坑内出土遺物（第18図）

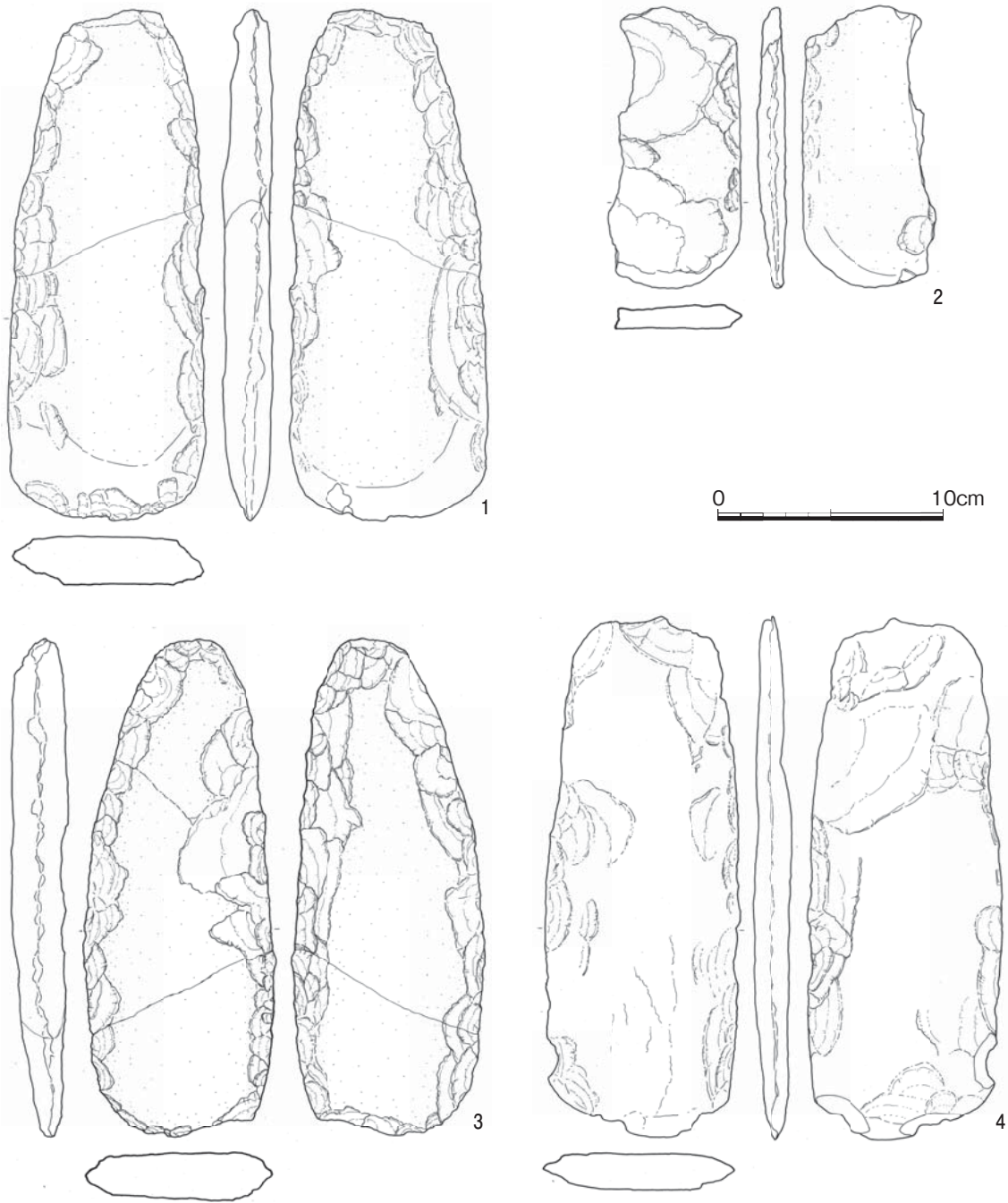
1～4は土坑内から出土した打製石斧である。いずれも安山岩を素材としていて、2は欠損品、ほか3本は完形品である。

1は板状素材の周縁に整形加工を施している、表裏面に大きく自然面が残る。扁平で基部がややすぼまる形状をなす。刃部には研ぎ出しがなされていたものとみられるが、使用により刃先はつぶれ、その後刃部再生のための剥離が片面から行われている。2は表裏面に自然面を残している。片方の側面から基部にかけて欠損しており、全体の形状は不明であるが、厚さ1.3cmの非常に薄手のものである。刃部と残存する側縁には、使用による強い摩耗が観察される。

3は板状素材の周縁に整形加工を行っており、表裏面には大きく自然面を残している。扁平で基部が刃部よりすぼまる形状で、基部の方が刃部より厚みがある。摩耗は刃部より側縁の方が強く、刃部の再生が途中で行われたものと思われる。4は板状素材の周縁への整形剥離ののち、刃部のみならず全体に研磨を施しており、器面の平坦化を図っている。全体に研磨が及んでいて刃部も鋭利であるという点では、磨製石斧と呼ぶ方がふさわしいかもしれない。石材の種類や強度、形状、共伴する遺物から判断される使用の目的は、木材等の伐採・加工ではなく、土掘り具としての使用が想定されることから、ここでは打製石斧としておく。刃部には使用によるものかは判然としないが、3箇所の刃こぼれが見られる。



東大窪遺跡土坑内出土石斧



第18図 東大窪遺跡土坑内出土遺物実測図 (S=1/3)

第3表 東大窪遺跡土坑内出土遺物観察表

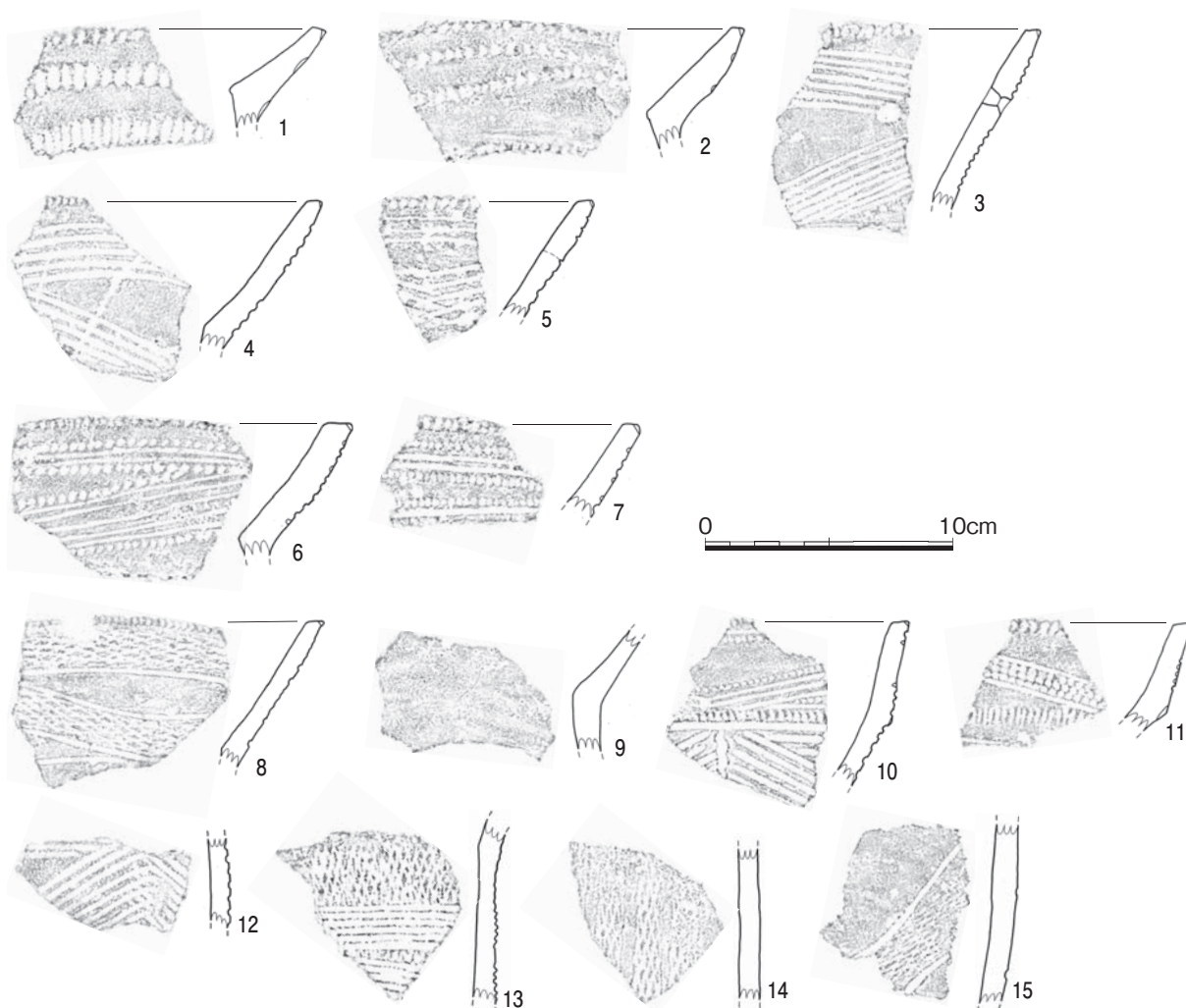
図	番号	器種	石材	区画	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
18	1	打製石斧	安山岩	44-N	22.6	8.7	2.1	648.0	斜方向に破断
	2	打製石斧	安山岩	44-N	12.4	5.8	1.3	125.7	欠損
	3	打製石斧	安山岩	44-N	22.0	8.5	2.4	595.5	斜方向に破断
	4	打製石斧	安山岩	44-N	23.1	8.5	1.7	530.0	

4 包含層ほか出土の遺物

(1) 土器 (第19図・第20図)

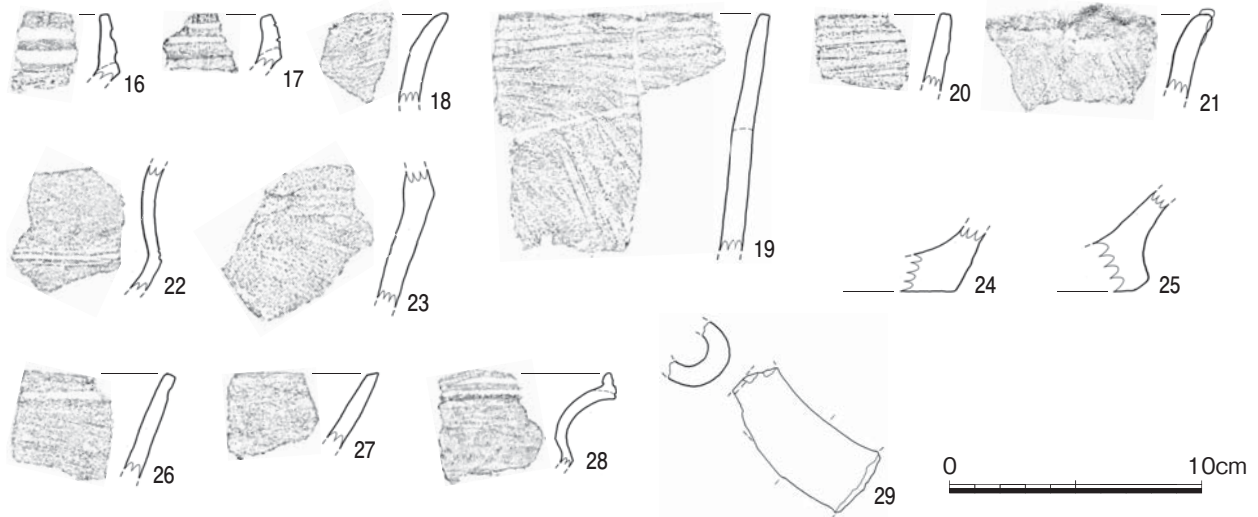
1～15は縄文時代早期の資料である。1～9は外傾する口縁部, 10・11は内屈する口縁部, 12～15は胴部である。1・2は断面が先細りとなる口縁部で, 外面に列点文, 口唇部外端に刻目を施す。3～5は口唇部外端に刻目を施し, 外面には平行沈線文を引く。また, 3には焼成後の穿孔が見られる。6・7は口唇部外端に刻目, 外面に平行沈線と列点文からなる文様を施す。8は口唇部外端に刻目, 外面に区画撚糸文を施す。9は無文である。10は口唇部外端と屈曲部に刻目, 外面に平行沈線文と列点文を施す。他の縄文時代早期資料に比べ, 砂粒の混入が少ない精緻な胎土である。11は口唇部外端と屈曲部に刻目, 外面に区画列点文を施す。12は平行沈線文, 13は撚糸文と平行沈線文, 15は区画撚糸文をもつ。14は撚糸文を施したのち縦方向に帯状のナデ消しを行っている。外面に炭化物の付着が認められる。

16～29は縄文時代後・晩期の資料である。16・17はタガ状を呈する鉢の口縁部で, どちらもやや内傾する。16は2条の凹線, 17は2条の沈線を引く。18～21は深鉢の口縁部である。19は大きく外反する。19・20は外面に刷毛目様の条痕が残る。21はやや外反し, 凹点の可能性がある指押さえが認められる。22は薄手の作りの鉢胴部で, 屈曲部直上に2条の沈線を引く。23は深鉢の胴屈曲部である。24は鉢もしくは深鉢の底部で, 外面及び底面には研磨調整を施す。25は深鉢底部で, 断面は張り出す。



第19図 東大窪遺跡包含層ほか出土土器実測図① (S=1/3)

26~28は浅鉢の資料である。26は内外面ともに研磨調整を施しており、器形はボウル状になるものか。27は口唇部を平坦に面取りする。28は大きく外反する頸部に口縁部文様帯をもち、2条の沈線を引く。29は注口土器の注口部である。胴部との接続部から剥離しており、注口先端部をわずかに残す。外面には丁寧な研磨調整を施している。



第20図 東大窪遺跡包含層ほか出土土器実測図② (S=1/3)

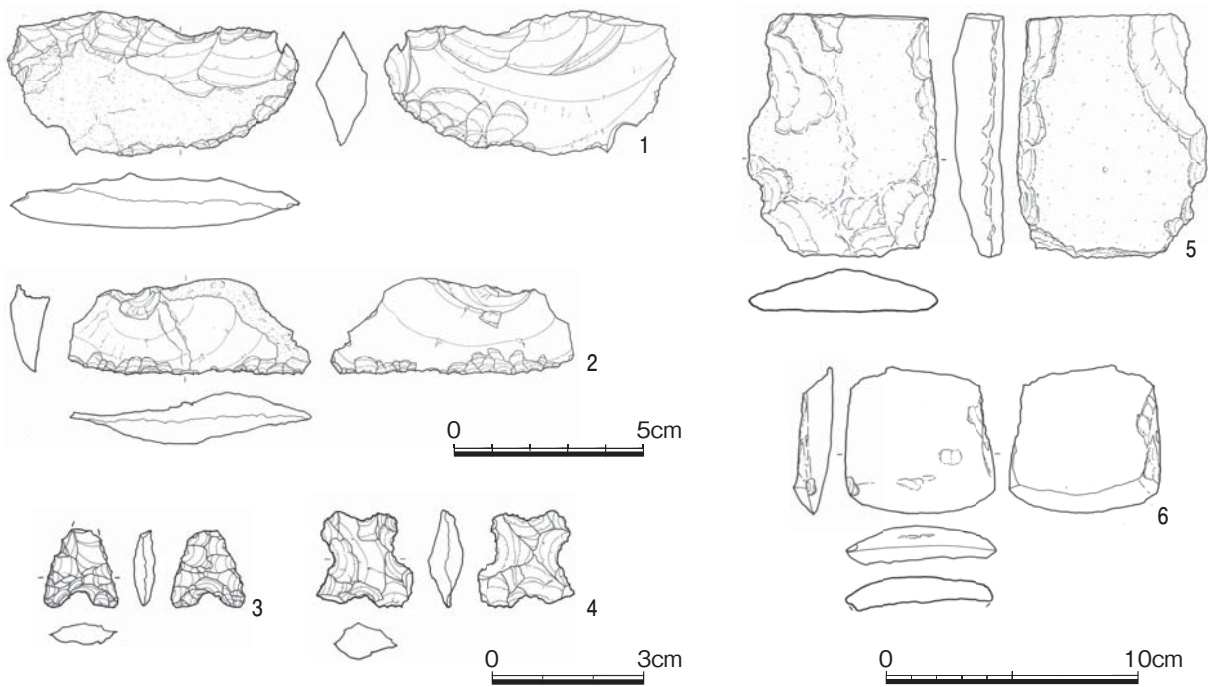
第4表 東大窪遺跡包含層ほか出土土器観察表

図	番号	取上番号	器種	区画	層位	文様・調整		色調		胎土	備考	
						外面	内面	外面	内面			
19	1	HOK-0335	深鉢	43-S	Ⅲ	列点	ナデ	にぶい黄褐色	明褐色	長石・石英	口唇部に刻目	
	2	HOK-0333	深鉢	43-S	Ⅲ	列点	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	長石・石英	口唇部に刻目	
	3	—	深鉢	—	—	攪乱	沈線	ナデ	褐色	にぶい褐色	角閃石・長石	口唇部に刻目 焼成後穿孔
	4	HOK-0280	深鉢	49-S	Ⅲ	沈線	ナデ	橙色	にぶい褐色	角閃石・長石	口唇部に刻目	
	5	HOK-0276	深鉢	49-S	Ⅲ	沈線	ナデ	橙色	にぶい橙色	角閃石・長石・石英	口唇部に刻目	
	6	HOK-0344	深鉢	42-N	Ⅲ	列点・沈線	ナデ	にぶい橙色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英	口唇部に刻目	
	7	HOK-0273	深鉢	50-N	Ⅲ	列点・沈線	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英	口唇部に刻目	
	8	HOK-0271	深鉢	50-N	Ⅲ	区画擦糸文・沈線	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英	口唇部に刻目	
	9	HOK-0272	深鉢	50-N	Ⅲ	ナデ	ナデ	灰白色	浅黄褐色	角閃石・長石		
	10	—	深鉢	—	—	攪乱	列点・刻目・沈線	ナデ	にぶい橙色	褐色	角閃石・長石・赤色粒子	口唇部に刻目
	11	HOK-0243	深鉢	51-S	Ⅲ	区画列点文・沈線・刻目	ナデ	にぶい黄褐色	明黄褐色	角閃石・長石・石英	口唇部に刻目	
	12	HOK-0269	深鉢	50-S	Ⅲ	沈線	ナデ	黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石		
	13	HOK-0258	深鉢	50-S	Ⅲ	擦糸文・沈線	ナデ	にぶい褐色	明褐色	角閃石・長石・石英		
	14	HOK-0244	深鉢	51-S	Ⅲ	擦糸文	ナデ	明黄褐色	明黄褐色	角閃石・長石・石英		
	15	HOK-0340	深鉢	43-S	Ⅲ	区画擦糸文	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英		
20	16	HOK-0153	鉢	47-N	Ⅱ	研磨、凹線	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	長石・石英・赤色粒子		
	17	HOK-0121	鉢	45-N	Ⅱ	ナデ、沈線	ナデ	褐色	褐色	長石・石英・赤色粒子		
	18	HOK-0138	深鉢	45-N	Ⅱ	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	長石・石英		
	19	HOK-0342	深鉢	43-N	Ⅲ	条痕・ナデ	ナデ	明黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英		
	20	HOK-0029	深鉢	44-N	Ⅱ	条痕	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石		
	21	HOK-0050	深鉢	44-N	Ⅱ	ナデ	ナデ	明赤褐色	にぶい橙色	角閃石・長石・石英		
	22	HOK-0082	深鉢	44-S	Ⅱ	ナデ、沈線	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英		
	23	HOK-0056	深鉢	44-S	Ⅱ	ナデ	研磨	にぶい黄褐色	明黄褐色	角閃石・長石・石英		
	24	HOK-0051	鉢or深鉢	44-S	Ⅱ	ナデ	ナデ	明赤褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英	底面研磨調整	
	25	HOK-0177	深鉢	48-S	Ⅱ	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい橙色	角閃石・長石・石英		
	26	HOK-0005	浅鉢	42-S	Ⅱ	研磨	擦過、研磨	褐色	灰黄褐色	角閃石・長石・石英		
	27	HOK-0355	浅鉢	51-S	Ⅲ	ナデ	ナデ	灰黄褐色	灰黄褐色	角閃石・長石・石英		
	28	HOK-0316	浅鉢	44-N	Ⅲ	研磨、沈線	研磨	にぶい黄褐色	浅黄橙	長石・石英		
	29	HOK-0090	注口	44-S	Ⅱ	研磨	ナデ	褐色	褐色	角閃石・石英・赤色粒子		

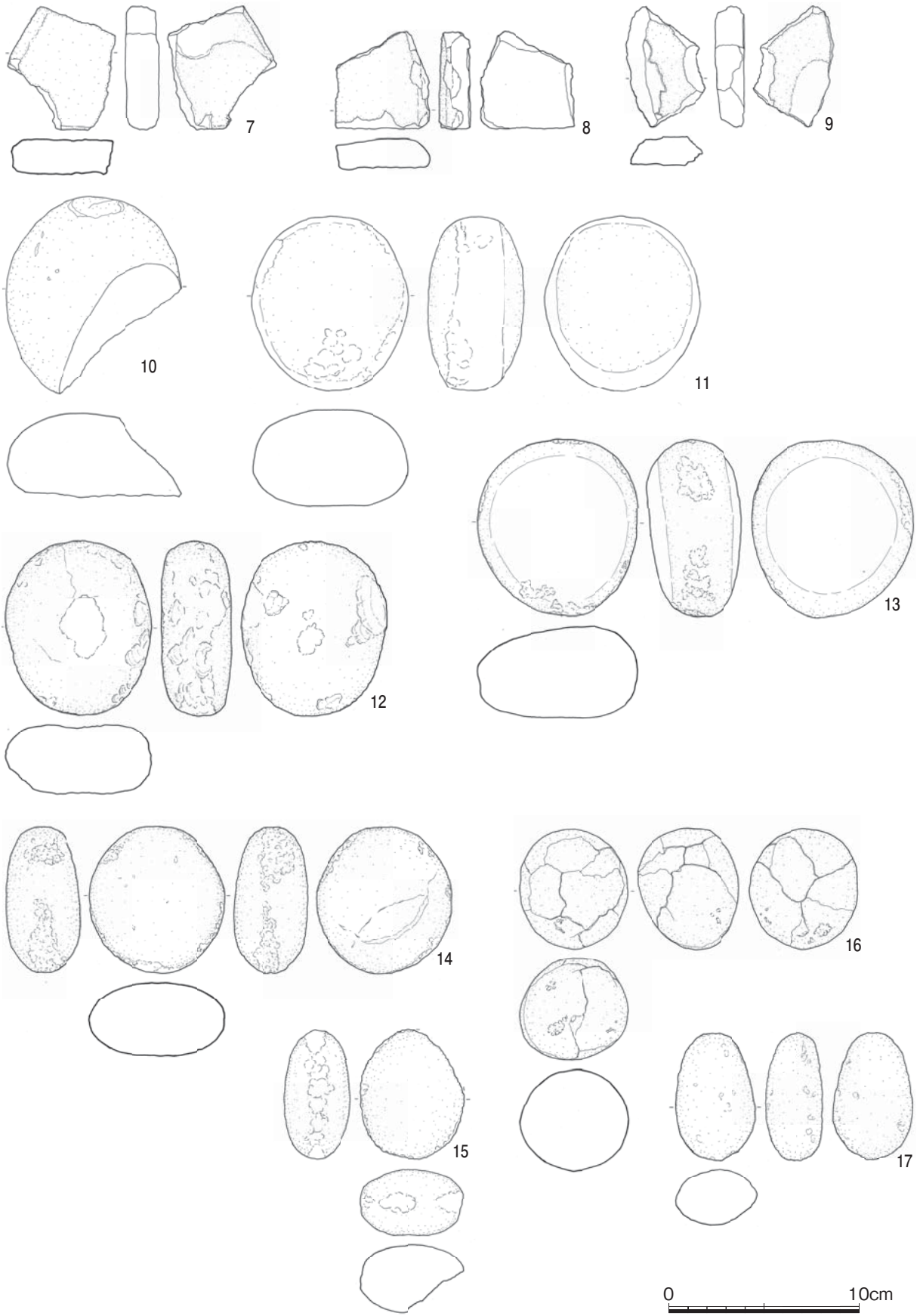
(2) 石器 (第21図・第22図)

1はサヌカイトの横長剥片を素材とするスクレイパーである。打点付近を除去し、弧状をなす末端部の一部に連続的な剥離調整を施す。2は玄武岩の横長剥片を素材とするスクレイパーである。打点付近は除去し、直線的な刃部を作出する。3は暗灰色黒曜石を素材とする石鏃である。4はサヌカイトを素材とするX字型の異形石器である。5は板状の安山岩を用いた打製石斧である。基部付近は欠損する。両側縁には使用による摩耗が確認されるが、それに比して刃部付近の摩耗は弱く、使用の途中で刃部の再生が図られたものと思われる。6は頁岩製の磨製石斧である。基部から刃部近くまで大きく欠損する。

7～9は砂岩製の砥石である。いずれも破片資料である。7・9は両面ともに研ぎ面をもつ。10は砂岩製の磨石である。11・12, 14～17は敲石, 13は磨石, 敲石の併用品である。14は砂岩を素材とし、他は安山岩を素材とする。11は表面端部及び周縁に潰痕が認められる。12は周縁に潰痕と打撃による剥落欠損が認められ、表裏面には凹部をもつ。13は表裏両面を磨り面としており、側面には潰痕が認められる。14は周縁に潰痕がめぐる。15は風化が著しいが、周縁に潰痕が観察される。16は球形をなす素材で、全体にクラックが入る。端部に線条痕が認められる。17の器面は風化が進む。右下端部に平坦部が見られ、潰痕と思われる。



第21図 東大窪遺跡包含層出土石器実測図① (1・2 : S=1/2, 3・4 : S=2/3, 5・6 : S=1/3)



第22図 東大窪遺跡包含層出土石器実測図② (S=1/3)

第5表 東大窪遺跡包含層出土石器観察表

図	番号	取上番号	器種	石材	区画	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
21	1	HOK-0186	スクレイパー	サヌカイト	49-N	II	7.6	3.7	1.3	36.2
	2	HOK-0252	スクレイパー	玄武岩	51-N	III	6.4	2.5	1.3	12.8
	3	HOK-0275	石鏃	黒曜石	50-N	III	1.5	1.4	0.4	0.7
	4	HOK-0379	異形石器	サヌカイト	48-N	III	1.9	1.9	0.7	1.7
	5	HOK-0162	打製石斧	安山岩	47-N	II	9.6	7.5	1.7	177.9
	6	HOK-0223	磨製石斧	頁岩	40-S	II	5.7	6.0	1.0	53.4
22	7	HOK-0311	砥石	砂岩	45-N	III	6.5	5.6	1.8	81.3
	8	HOK-0203	砥石	砂岩	51-S	II	5.1	4.9	1.6	53.1
	9	HOK-0233	砥石	砂岩	52-N	III	6.0	3.8	1.5	41.8
	10	HOK-0314	磨石	砂岩	44-S	III	13.5	9.1	4.4	452.5
	11	HOK-0293	敲石	安山岩	48-N	III	9.2	8.1	5.1	572.7
	12	HOK-0323	敲石	安山岩	43-S	III	9.1	7.6	3.7	392.1
	13	HOK-0294	磨石・敲石	安山岩	48-N	III	9.3	8.4	4.9	567.9
	14	HOK-0312	敲石	砂岩	45-N	III	7.7	7.1	3.9	308.7
	15	HOK-0304	敲石	安山岩	45-S	III	6.8	5.4	3.5	155.7
	16	HOK-0004	敲石	安山岩	42-S	II	6.3	5.7	5.3	223.3
	17	HOK-0212	敲石	安山岩	51-N	II	6.6	4.1	3.0	102.4

第V章 中萩原遺跡の本調査

1 調査の経過

調査は、中萩原遺跡から北に約150m離れた位置にある東大窪遺跡での本調査と並行して実施した。調査範囲は、長さ約68m、最大幅約7m、面積約200㎡の区域である。調査区は市道から畑へと入る道によって南北に分かれている。

本調査対象地の調査前の状況は畑地であったが、市道と接する調査区西側には樹木が生えており、その伐採にあたっては、工事主体である市建設課の協力を得た。

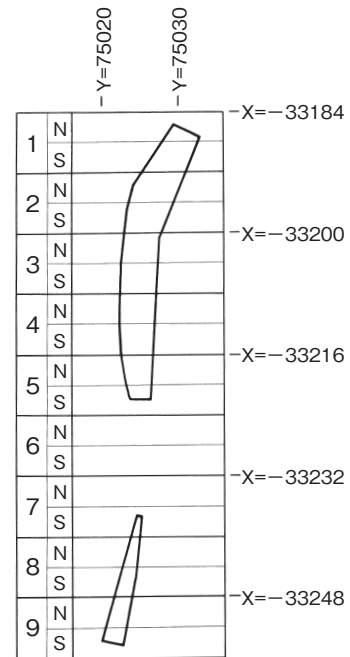
調査区の設定では、調査区全体を北から南へ8m間隔で区切る大区画を設定し、さらに各大区画を4mごとに二分した小区画を設定した。大区画の名称は、今回の調査区が遺跡の北端部にあたるため、今回の調査区において最北端にある大区画を「1」とし、以南の大区画に「2」「3」「4」と連続した番号を付した。小区画の名称は北側を「N」、南側を「S」とし、たとえば北から3番目の小区画は「2-N区」、4番目の小区画は「2-S区」のように呼称することとした。

掘削作業は、表土はぎを含め全ての工程を人力で行った。7月9日に表土はぎに着手し、のべ3日間かけてI層を掘削した。つづいて7月17日からII層、8月2日からIII層の掘削に着手し、それぞれ1.5日間程度で掘削を行った。雨天が続き中萩原遺跡に先行して掘削にはいった東大窪遺跡での作業が遅れたことや調査員の経験不足等により進捗が大幅に遅れ、調査の最終盤に行った中萩原遺跡の包含層掘削は急ピッチで行なうこととなった。

遺物の取り上げは、II層とIII層以外から出土したものは区画ごとに取り上げ、遺物が多く含まれるII層とIII層から出土したものは座標観測によって出土地点の記録を行い遺物分布図を作成した。遺構は、III層上面とIV層上面において検出・掘削作業を行い、遺構配置図を作成した。遺構の掘削にあたっては、原則的に全て半裁し、形状と深度等を確認したのちに全体を掘削した。遺構内から出土した遺物は、遺構ごとに取り上げた。

土層は、調査区の北壁、東壁、南壁及び調査区内に16mおきに設けた土層観察用ベルトの堆積状況を土層実測図として記録した。なお調査区東壁は、3か所で屈曲しているためa～dの4つに分割し、図化した。作業状況や遺構・遺物の検出状況等は随時写真撮影による記録を行い、完掘した段階でラジコンヘリによる航空写真の撮影を実施した。

本調査完了後は、道路工事の着工が控えていたため、埋め戻し作業は行わずに工事主体者への現地引き渡しを行った。



第23図 中萩原遺跡調査区画設定図 (S=1/1,000)

2 基本土層 (第24図)

今回の調査における基本土層は次のとおりである。

I a層 灰褐色土 (Hue7.5YR4/2)。表土。

I b層 灰褐色土 (Hue7.5YR4/2)。

II層 黒褐色土 (Hue7.5YR2/1)。縄文時代晩期の遺物を多く含む。

III層 褐色土 (Hue7.5YR4/6)。縄文時代早期の遺物を多く含む。

IV層 黒褐色土 (Hue7.5YR2/2)。

層位は、範囲確認調査で見られた基本層序を概ね踏襲する。調査区は、北から南に向かって緩やかに傾斜しており北端と南端の高低差は約5mである。

II層とIII層は遺物を多く含む層で、II層では縄文時代後・晩期の遺物を、III層では塞ノ神式土器を主体とする縄文時代早期の遺物を多く検出した。

近接する東大窪遺跡との土層の比較をすると、土色の黒みがつよく縄文時代晩期の遺物が主体的に出土するという共通した特徴を持つ中萩原遺跡II層と東大窪遺跡II層は対応し、また、上層と比較し土色の黄みがつよく縄文時代早期の遺物が出土する中萩原遺跡III層と東大窪遺跡III層は対応する。

3 遺構

(1) 概要

今回の調査では、IV層上面とIII層上面で遺構検出を行い、IV層上面では5基のピットを、III層上面では2基のピットを検出した。

調査区内で確認された現代の攪乱については、調査区全体で市道と接する西側が削平を受け法面を形成していることが確認された。調査区西側には調査前に樹木が生えており、調査区西側の土層の上半部は、その影響により攪乱したものと推測される。

(2) IV層上面 (第25図)

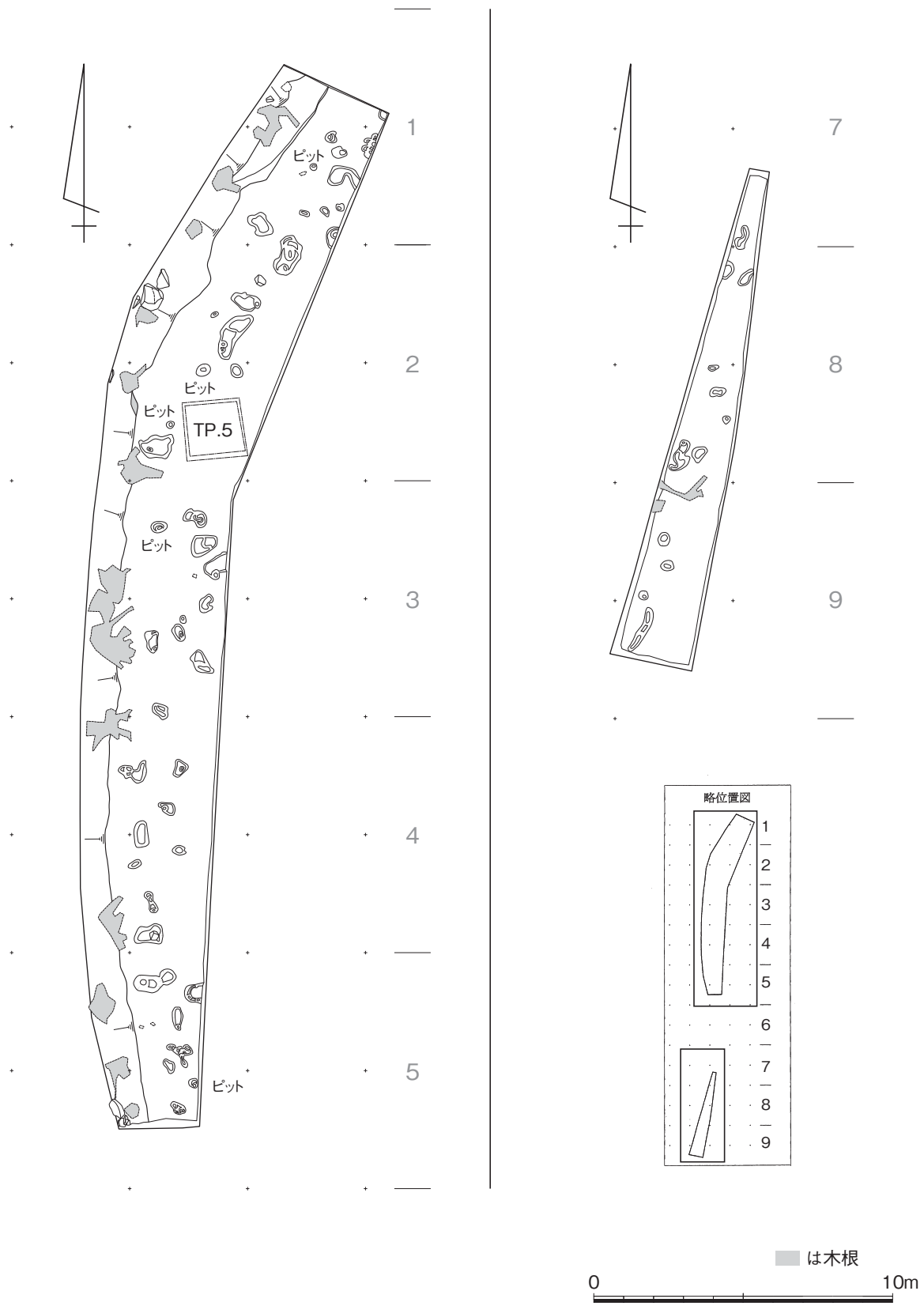
調査区内全体をとおして明確な掘り込みを有する遺構は少なく、大半が不定形で浅い植物の根穴であった。調査区全体でピット5基を確認した。ピット検出地点の内訳は1-S区1基、2-S区2基、3-N区1基、5-S区1基である。遺構及び根穴から出土した遺物が数点あるが、いずれも細片のため図化に至っていない。

(3) III層上面 (第26図)

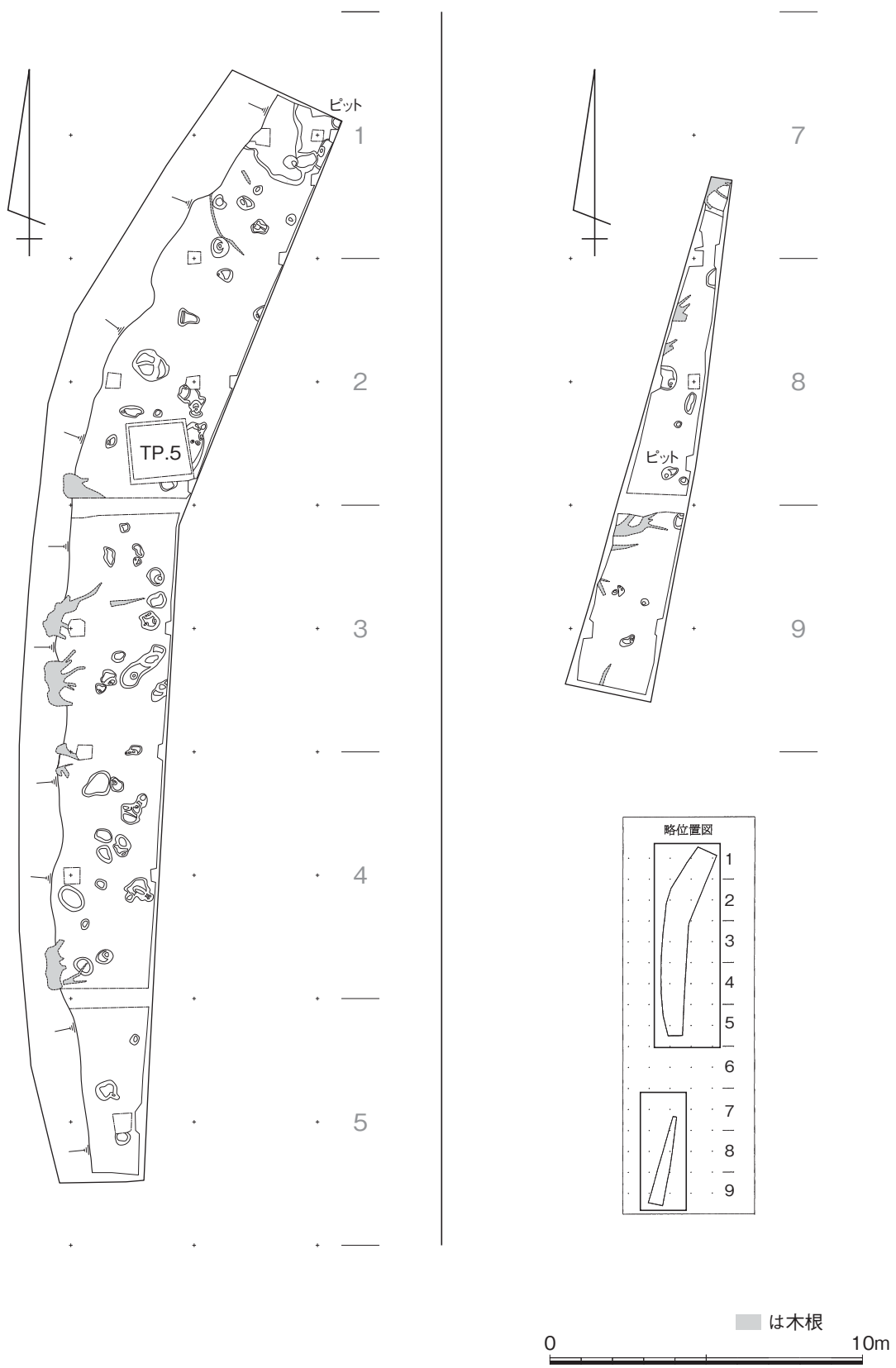
IV層上面と同様に、明確な遺構は少なく大半が植物の根穴であった。1-N区で1基、8-S区で1基、合計して調査区全体で2基のピットを確認した。遺構及び根穴から出土した遺物も数点あるが、いずれも細片のため図化に至っていない。



第24図 中萩原遺跡土層実測図 (S=1/100)



第25図 中萩原遺跡Ⅳ層上面遺構配置図 (S=1/200)



第26図 中萩原遺跡Ⅲ層上面遺構配置図 (S=1/200)

4 包含層出土の遺物

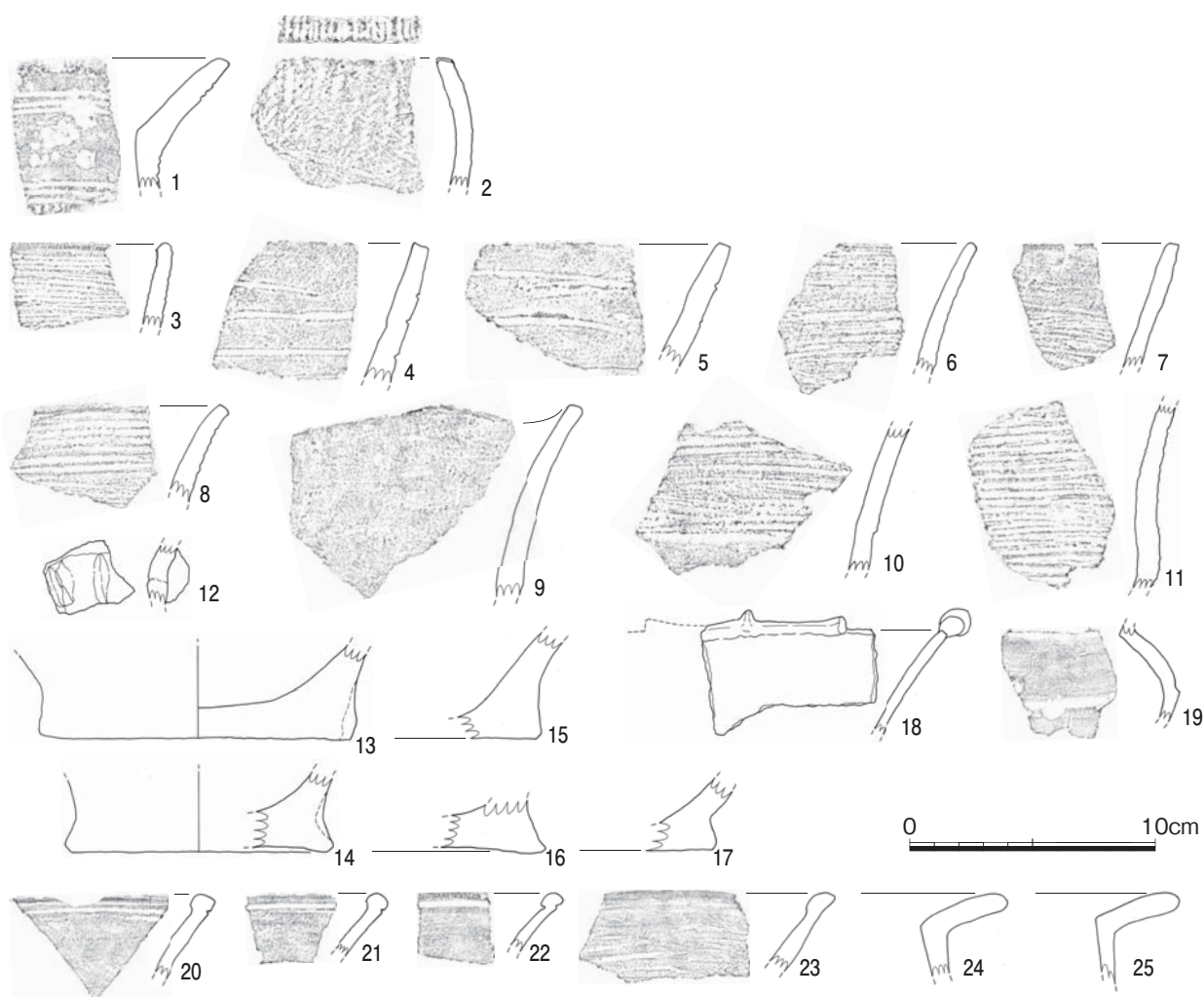
(1) 土器 (第27図)

1は縄文時代早期の土器である。1は深鉢の大きく外傾する口縁部で、器面の状態があまり良くないが、外面に平行沈線文が認められる。2は時期不詳であるが、内湾する口縁部の資料で、口唇部に刻目をもち、外面には縄文と見られる文様が施される。

3～23は縄文時代晩期の資料である。3は深鉢の口縁部で、内外面に貝殻条痕調整を残す。4～9は大きく外傾する深鉢の口縁部で、6, 8, 9は外反する。4・5は間隔の広い平行沈線文を引く。9は波状口縁をなす。10は深鉢の胴部で、外面に段を持ち、段より上位には貝殻条痕調整を残す。11は深鉢の胴部で断面は緩いS字状をなす。13～17は深鉢底部で、13は底径12.6cm, 14は復元底径10.2cmを測る。

18～23は精製浅鉢である。18は大きく頸部が開き、口縁部には突起をもつ。19は扁球状をなす胴部で、最大径付近に段をもつ。20～23は玉縁状の口縁部で大きく外に開く。20～22は外面に1条の沈線を引く。

24・25は弥生時代中期の甕口縁部で、おそらく同一個体と思われる。どちらも外面に炭化物の付着が認められる。



第27図 中萩原遺跡包含層出土土器実測図 (S=1/3)

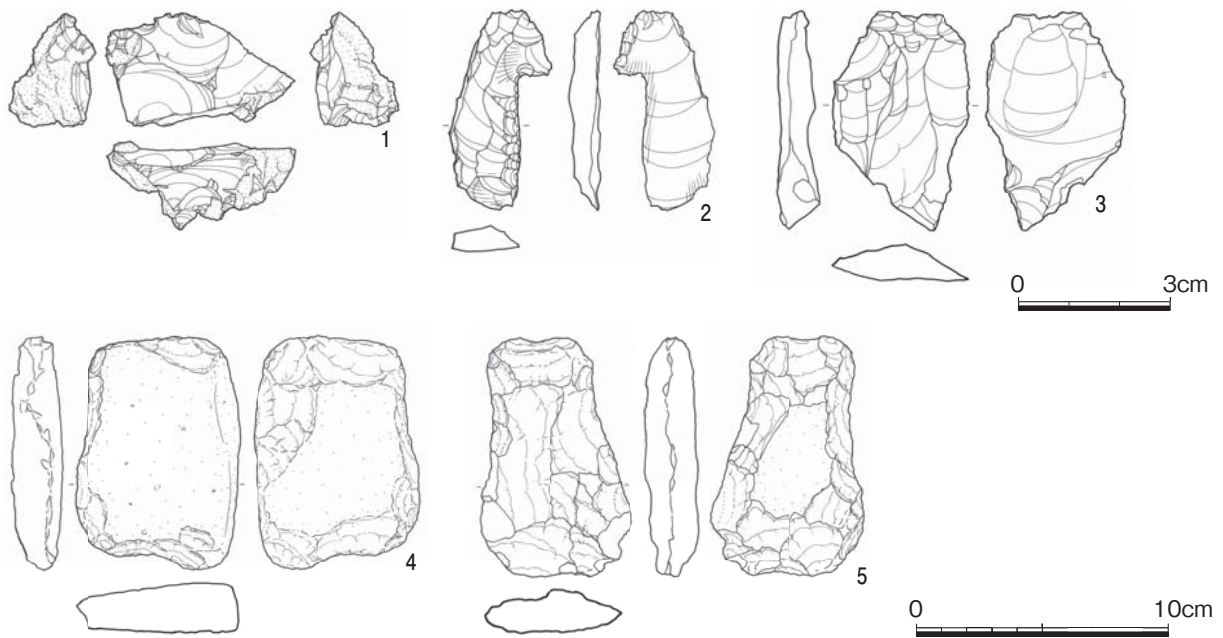
第6表 中萩原遺跡包含層出土土器観察表

図	番号	取上番号	器種	区画	層位	文様・調整		色調		胎土	備考
						外面	内面	外面	内面		
27	1	NHW-0273	深鉢	2-N	Ⅲ	沈線	ナデ	橙色	にぶい黄褐色	角閃石・長石	
	2	NHW-0309	深鉢	3-N	Ⅲ	縄文カ	ナデ	褐灰色	褐灰色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	口唇部に刻目
	3	NHW-0193	深鉢	9-N	Ⅱ	条痕	条痕	赤褐色	黒褐色	長石・石英	
	4	NHW-0217	深鉢	3-S	Ⅱ	ナデ, 沈線	ナデ	明褐色	明黄褐色	角閃石・長石・石英	
	5	NHW-0161	深鉢	9-S	Ⅱ	擦過・ナデ, 沈線	貝殻条痕・ナデ	赤褐色	明赤褐色	角閃石・長石	
	6	NHW-0006	深鉢	2-S	Ⅱ	貝殻条痕・ナデ	貝殻条痕・ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・雲母・赤色粒子	
	7	NHW-0190	深鉢	9-N	Ⅱ	貝殻条痕・ナデ	ナデ	橙色	橙色	角閃石・長石・石英	
	8	NHW-0369	深鉢	4-S	Ⅲ	貝殻条痕	ナデ	にぶい黄褐色	褐灰色	角閃石・長石	
	9	NHW-0374	深鉢	2-S	Ⅲ	擦過・ナデ	ナデ	にぶい橙色	明赤褐色	角閃石・長石・石英	
	10	NHW-0370	深鉢	4-S	Ⅲ	貝殻条痕	ナデ	明黄褐色	褐灰色	角閃石・長石・雲母	
	11	NHW-0145	深鉢	4-S	Ⅱ	貝殻条痕	貝殻条痕・ナデ	明黄褐色	明黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	12	NHW-0348	深鉢	3-S	Ⅲ	ナデ	ナデ	灰褐色	橙色	角閃石・長石	粘土塊貼付
	13	NHW-0344	深鉢	3-S	Ⅲ	ナデ	ナデ	橙色	橙色	角閃石・長石・石英	
	14	NHW-0160	深鉢	9-S	Ⅱ	ナデ	ナデ	明褐色	にぶい橙色	角閃石・長石・石英	
	15	NHW-0388	深鉢	9-S	Ⅲ	ナデ	ナデ	赤褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英	
	16	NHW-0395	深鉢	9-N	Ⅲ	ナデ	ナデ	明黄褐色	橙色	角閃石・長石・石英	
	17	NHW-0039	深鉢	4-S	Ⅱ	ナデ	ナデ	橙色	灰褐色	角閃石・長石・石英	
	18	NHW-0096	浅鉢	3-S	Ⅱ	研磨	研磨	明黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英	口縁部に突起
	19	NHW-0048	浅鉢	4-N	Ⅱ	研磨	研磨	橙色	にぶい黄褐色	角閃石・長石	
	20	NHW-0226	浅鉢	4-N	Ⅱ	研磨, 沈線	研磨	灰黄褐色	灰黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	21	NHW-0292	浅鉢	2-S	Ⅲ	研磨, 沈線	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英	
	22	NHW-0102	浅鉢	3-S	Ⅱ	研磨, 沈線	研磨	灰黄褐色	灰黄褐色	角閃石・長石	
	23	NHW-0365	浅鉢	4-S	Ⅲ	研磨	研磨	にぶい黄褐色	灰黄褐色	角閃石・長石・石英	
	24	NHW-0059	甕	4-N	Ⅱ	ナデ	ナデ	黒褐色	明黄褐色	石英	
	25	NHW-0363	甕	4-N	Ⅲ	ナデ	ナデ	明黄褐色	明黄褐色	長石・石英	24と同一個体カ

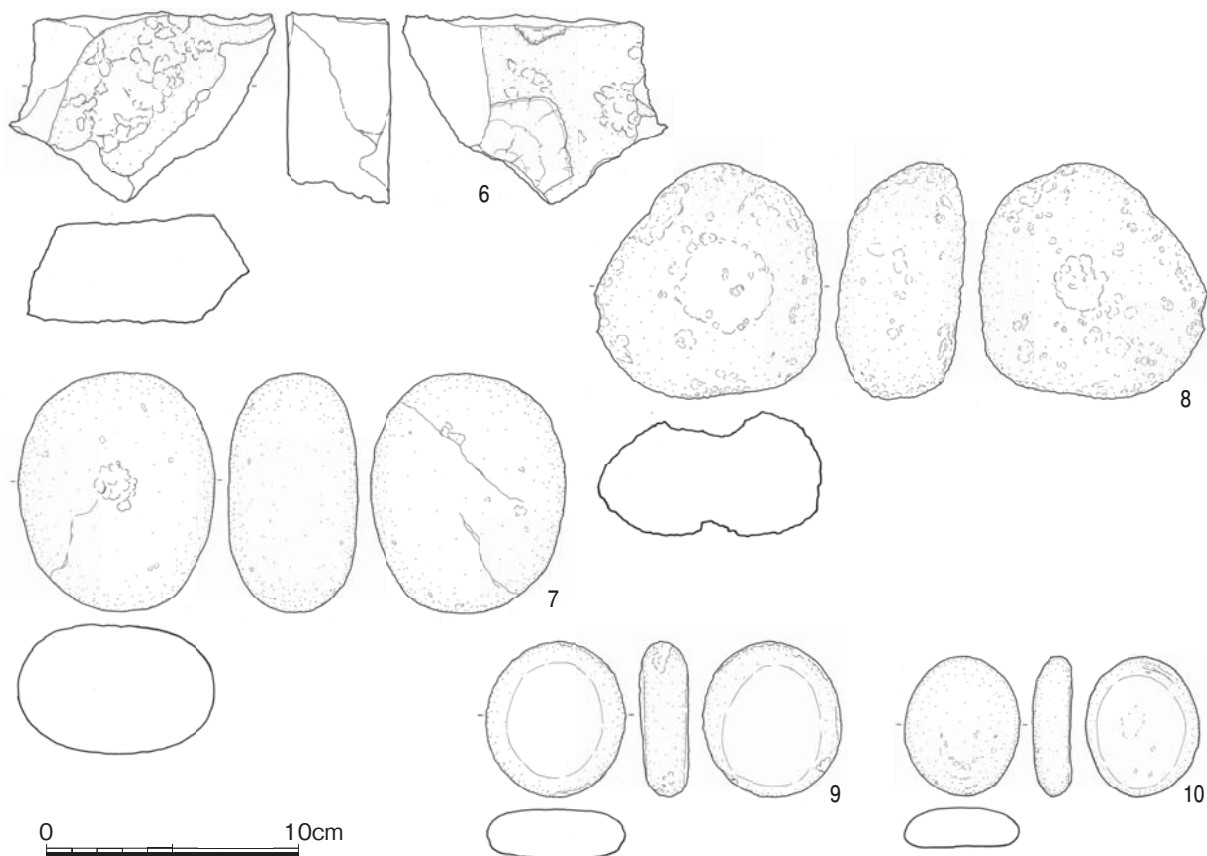
(2) 石器 (第28図・第29図)

1は漆黒色黒曜石の石核である。背面から側面には大きく自然面を残す。2は漆黒色黒曜石の二次加工剥片である。縦長剥片の一側辺におもに主要剥離面側から連続的な剥離を行って直線的に仕上げ、その上位は鉤形となる。3はパテナの進行が強く、灰色を呈する黒曜石の縦長の剥片であるが、発掘調査時の新しい欠損により、漆黒色の黒曜石が素材であることが確認できる。4・5は安山岩を素材とする打製石斧である。4は表裏面と片方の側辺に素材面を残す。5は小型で撥形を呈し、片面に自然面を残すも、両面全周にわたって剥離が行われている。

6は砥石を転用した台石である。両面に研ぎ面をもち、打撃による剥落欠損と潰痕が多数認められる。7は安山岩製の敲石である。表面中央部に潰痕が認められる。8は安山岩の自然礫を用いた凹石で、両面に凹部をもつ。9は砂岩製の磨石・敲石である。側面主軸両端部に潰痕をもち、表裏面は磨り面となる。10は砂岩製の磨石である。



第28図 中萩原遺跡包含層出土石器実測図① (1～3 : S=2/3, 4・5 : S=1/3)



第29図 中萩原遺跡包含層出土石器実測図② (S=1/3)

第7表 中萩原遺跡包含層出土石器観察表

図	番号	取上番号	器種	石材	区画	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
28	1	NHW-0099	石核	黒曜石	3-N	II	2.2	3.7	1.7	8.6
	2	NHW-0087	二次加工剥片	黒曜石	3-S	II	4.0	1.6	0.6	3.4
	3	NHW-0011	剥片	黒曜石	2-S	II	4.3	2.7	0.7	7.9
	4	NHW-0121	打製石斧	安山岩	3-N	II	9.3	6.5	2.0	169.5
	5	NHW-0182	打製石斧	安山岩	7-S	II	9.5	6.0	2.1	128.5
29	6	NHW-0162	砥石	砂岩	9-S	II	7.4	9.5	4.2	366.6
	7	NHW-0364	磨石・敲石	安山岩	4-N	III	9.5	7.7	5.1	584.5
	8	NHW-0306	凹石	安山岩	2-S	III	9.3	9.0	5.2	378.8
	9	NHW-0287	磨石・敲石	砂岩	2-S	III	6.1	5.5	2.0	99.3
	10	NHW-0008	磨石	砂岩	2-N	II	5.6	4.5	1.6	57.6

第Ⅵ章 まとめ

東大窪遺跡の成果

東大窪遺跡の成果においてまず特筆すべきは、縄文時代後・晩期に属するものと考えられる4本の打製石斧が出土した土坑の検出である。打製石斧のうち欠損品である1本を除く残りの3本は、長さが23cm程度、最大幅が8.5cm程度と規格性がうかがえ、刃先がそろった配置での検出であり、意図的な埋納であると考えられる。

主要な遺物包含層であるⅡ・Ⅲ層からの遺物の出土状況について見てみる。出土地点を記録した遺物は、土器274点、石器83点の計357点である。土器の所属時期については、縄文時代早期と縄文時代後・晩期のものに大別され、前者が93点(33.9%)、後者が176点(64.2%)である。層位的には、縄文時代早期の土器がⅢ層より(66点, 71.0%)、縄文時代後・晩期の土器がⅡ層より(150点, 85.2%)、それぞれ主体的に出土している。遺物の分布状況としては、縄文時代後・晩期の土器が43~45区において集中する傾向にあり、48区以南になると出土はまばらである。土坑の検出についても44区からであり、縄文時代後・晩期の土器の集中範囲と重なる。

中萩原遺跡の成果

次に中萩原遺跡の遺物出土状況について述べる。出土地点を記録した遺物は、土器339点、石器67点の計406点である。土器についてみると、縄文時代早期の土器が8点(2.4%)、縄文時代後・晩期の土器が305点(90.0%)、弥生時代22点(6.5%)となっている。土器の主体を占めるのは、縄文時代後・晩期の資料であり、層位的な出土状況としては、305点中197点(64.6%)がⅡ層からの出土である。ただ、この結果は東大窪遺跡Ⅱ層の縄文時代後・晩期土器よりは構成比率が低く、第Ⅴ章で指摘があるように掘削精度の問題を考慮しておく必要がある。

また、同一個体の破片資料が多く含まれると考えられるが、弥生時代中期の資料が若干見られた。

東大窪・中萩原両遺跡の比較と雲仙火山群東麓における位置づけ

今回の東大窪遺跡と中萩原遺跡の発掘調査における出土遺物を比較すると、東大窪遺跡においては縄文時代早期の資料がある程度まとまって良好に出土するのに対して、中萩原遺跡での出土はごくわずかである。縄文時代後・晩期の資料については、東大窪遺跡では口縁部文様帯に凹線を引く鉢、屈曲部直上に沈線を引く鉢、注口土器など、肥後地方でいうところの御領式期や天城式期に属するものが多くみられ、深鉢の張り出し底などやや時期の下るものもあり、ある程度の時期幅が認められる。一方、中萩原遺跡では、間隔の広い平行沈線文を引く深鉢、蝶ネクタイ状突起をもつ深鉢、深鉢の張り出し底、扁球状の肩部でいわゆる「国崎タイプ」と呼ばれるような胴部に段をもつ浅鉢、玉縁で大きく開く口縁の浅鉢など、黒川式期に属するものの出土が大半を占める。

両遺跡から出土する石器の素材としては、一部島原半島産出と考えられる安山岩を用いるが、黒曜石、サヌカイト、砂岩、頁岩、結晶片岩といった他地域からの搬入石材も多用している。こうした石器素材の利用状況は、雲仙火山群東麓における多くの縄文遺跡とも一致するところである。

層位的な遺物の出土傾向としては、雲仙火山群東麓部においては、黒色・褐色系の色調を呈する層位から縄文時代後・晩期の資料が、その下位に位置する黄褐色系の土層から縄文時代早期の資料が主体的に出土するという様相が認められており、それから例にもれず東大窪・中萩原両遺跡のⅡ層・Ⅲ層がこれに相当するものと考えてよからう。

また、雲仙火山群東麓部の縄文時代遺跡においては、縄文時代早期と縄文時代後・晩期とが複合して検出される場合が多々あり、一方でその間をつなぐ縄文時代前・中期の展開が確認できないことが特徴の一つである。今回の東大窪・中萩原両遺跡の成果もそれにたがわないものであった。今後は、そうした縄文時代を通じての人類活動の盛衰が何に起因するものであるかを明らかにしていく必要がある。

加えて、標高200mを超える中萩原遺跡において、少数ではあるが弥生時代中期の資料が認められた。このことが、水田農耕に大きくは依存することなく山麓部での活動が行われていたことを示すのであれば、島原半島において弥生時代前期遺跡が希薄であることとも合わせて、雲仙山麓域での弥生時代中期遺跡の展開として興味深い成果である。

[参考文献]

久原卷二 1994 「地理的歴史的環境」『県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化時緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書第116集 長崎県教育委員会
 本多和典編 2007 『権現脇遺跡』南島原市文化財調査報告書第1集 南島原市教育委員会
 本多和典 2018 『古作遺跡』南島原市文化財調査報告書第10集 南島原市教育委員会
 本多和典 2018 『慈恩寺跡』南島原市文化財調査報告書第14集 南島原市教育委員会

第8表 東大窪遺跡出土遺物集計

	土器	石器	計
Ⅱ層	179	31	210
Ⅲ層	95	52	147
計	274	83	357

第9表 東大窪遺跡土器内訳

	縄文時代 早期	縄文時代 後・晩期	不明	計
Ⅱ層	27	150	2	179
Ⅲ層	66	26	3	95
計	93	176	5	274

第10表 東大窪遺跡石器石材別内訳

	黒曜石	サヌカイト	安山岩	砂岩	頁岩	結晶片岩	計
Ⅱ層	9	13	5	2	1	1	31
Ⅲ層	11	18	13	8	2	0	52
計	20	31	18	10	3	1	83

第11表 中萩原遺跡出土遺物集計

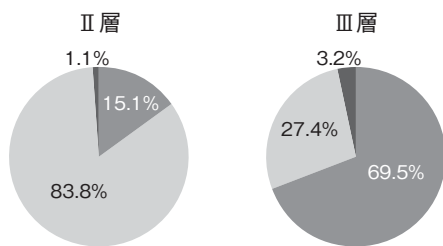
	土器	石器	計
Ⅱ層	223	39	262
Ⅲ層	116	28	144
計	339	67	406

第12表 中萩原遺跡土器内訳

	縄文時代 早期	縄文時代 後・晩期	弥生時代	不明	計
Ⅱ層	2	197	21	3	223
Ⅲ層	6	108	1	1	116
計	8	305	22	4	339

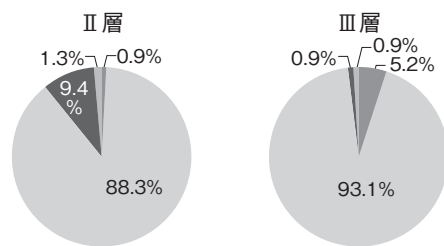
第13表 中萩原遺跡石器石材別内訳

	黒曜石	サヌカイト	安山岩	砂岩	計
Ⅱ層	27	2	6	4	39
Ⅲ層	17	2	6	3	28
計	44	4	12	7	67



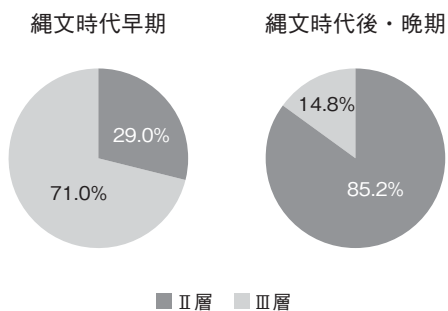
■ 縄文時代早期 ■ 縄文時代後・晩期 ■ 不明

第30図 東大窪遺跡土器構成比率（層位別）



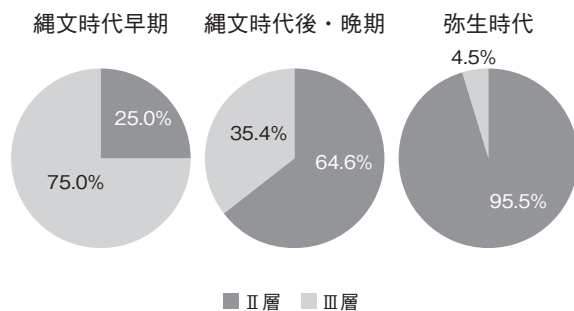
■ 縄文時代早期 ■ 縄文時代後・晩期 ■ 弥生時代 ■ 不明

第32図 中萩原遺跡土器構成比率（層位別）



■ Ⅱ層 ■ Ⅲ層

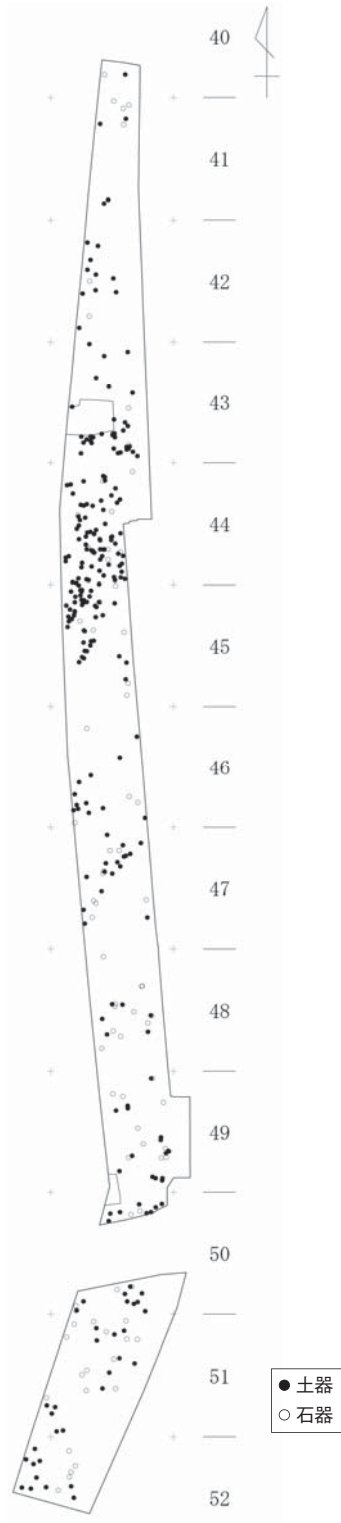
第31図 東大窪遺跡土器構成比率（時期別）



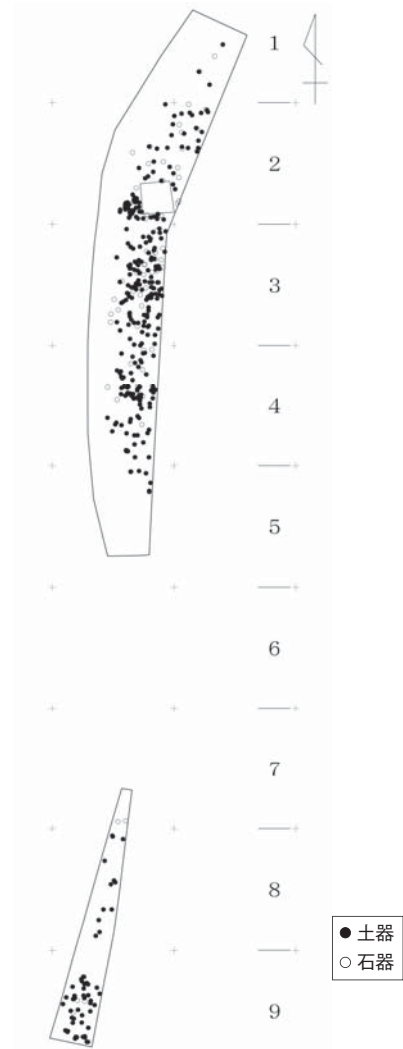
■ Ⅱ層 ■ Ⅲ層

第33図 中萩原遺跡土器構成比率（時期別）

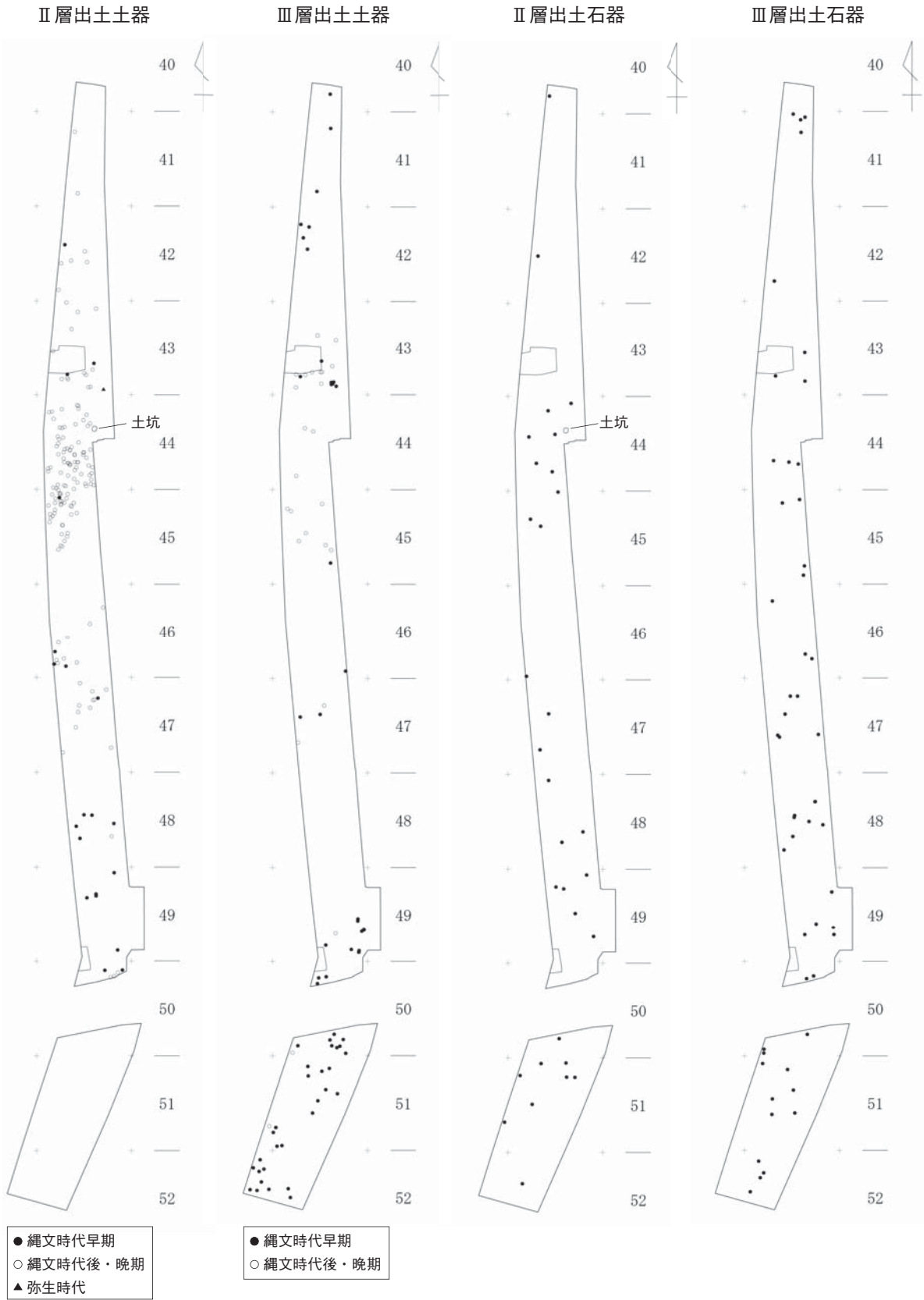
東大窪遺跡Ⅱ・Ⅲ層



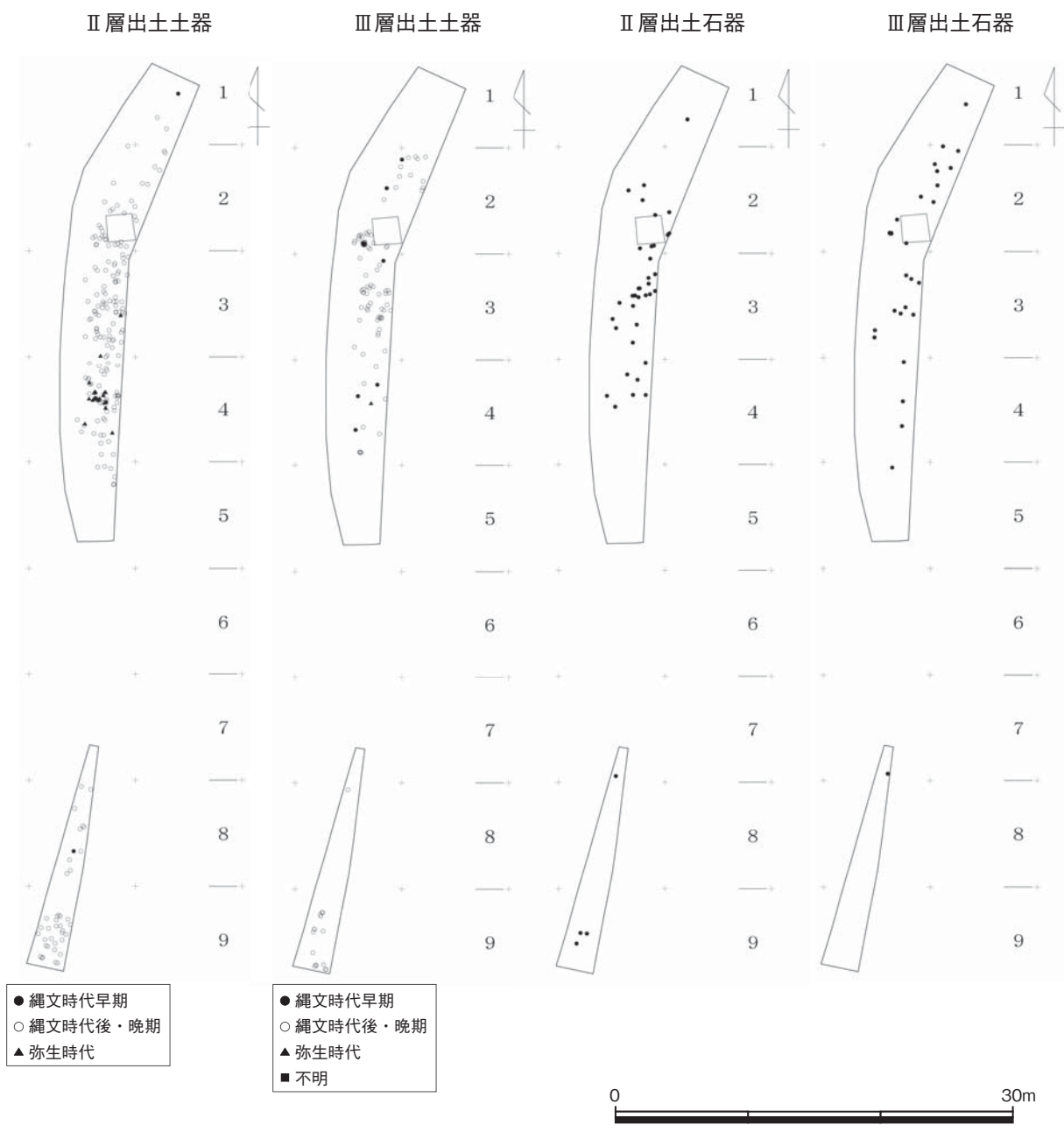
中萩原遺跡Ⅱ・Ⅲ層



第34図 東大窪遺跡・中萩原遺跡出土遺物分布 (S=1/500)



第35図 東大窪遺跡出土遺物分布 (S=1/500)



第36図 中萩原遺跡出土遺物分布 (S=1/500)

圖 版



調査区上空から平成新山を望む（南から）



調査区上空から有明海を望む（北から）

東大窪遺跡・中萩原遺跡航空写真

図版 2



TP.1 西壁土層 (東から)



TP.2 西壁土層 (東から)



TP.3 西壁土層 (東から)



TP.4 西壁土層 (東から)



TP.5 西壁土層 (東から)



TP.6 西壁土層 (東から)



TP.7 西壁土層 (東から)

試掘・範囲確認調査調査坑土層



TP. 2 Ⅲ層遺物検出状況



TP. 2 Ⅲ層遺物出土状況



TP. 5 Ⅲ層遺物検出状況



TP. 5 Ⅳ層上面遺構検出状況



作業状況①



作業状況②



作業状況③



作業状況④

試掘・範囲確認調査調査状況



試掘・範囲確認調査出土遺物①



試掘・範囲確認調査出土遺物②



東大窪遺跡調査区全景



42-N区～43-S区西壁土層（東から）



52-N区～52-S区西壁土層（東から）



46-N区～47-S区Ⅳ層上面遺構検出状況
（南西から）



46-N区～47-S区Ⅳ層上面遺構完掘状況
（南西から）



47-N区Ⅲ層上面遺構検出状況（西から）



47-N区～47-S区Ⅲ層上面遺構完掘状況
（南西から）



44-S区遺物検出作業状況（南西から）



44-N区～45-S区Ⅱ層遺物検出状況
（南西から）



遺物出土状況①



遺物出土状況②



遺物出土状況③



遺物出土状況④



作業状況①



作業状況②

東大窪遺跡調査状況②



土坑検出状況①

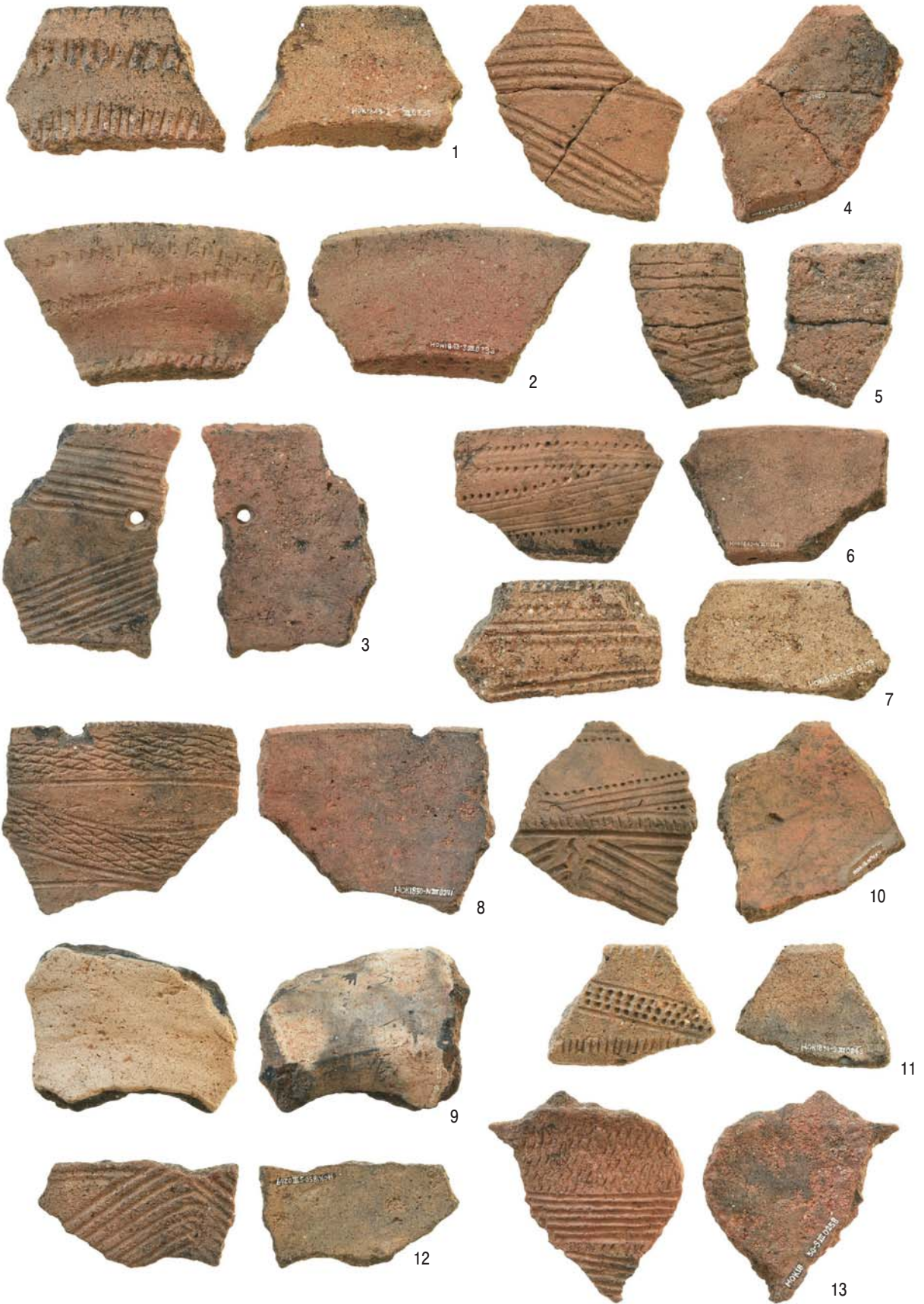


土坑検出状況②

東大窪遺跡土坑検出状況



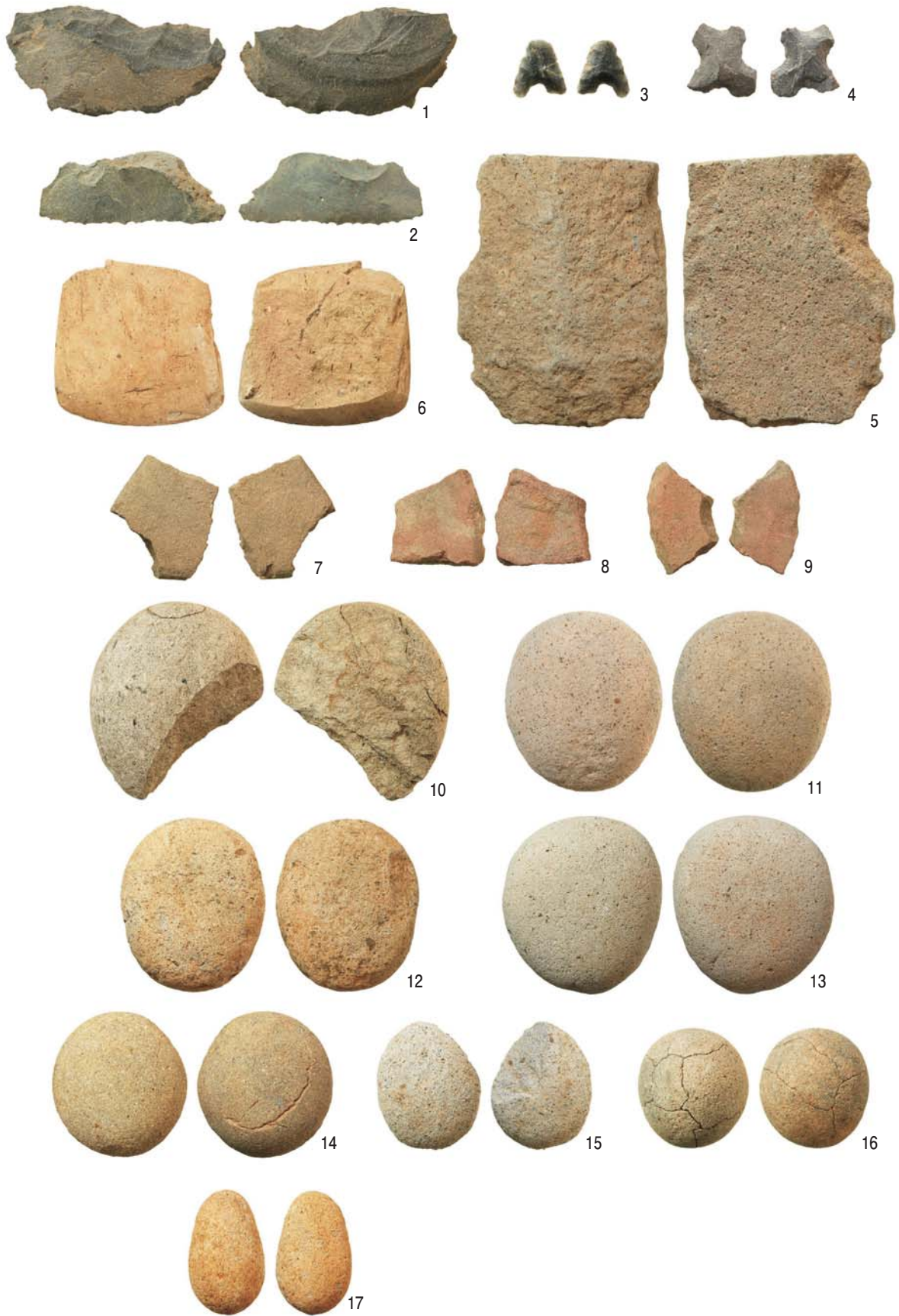
東大窪遺跡土坑内出土遺物



東大窪遺跡出土遺物①



東大窪遺跡出土遺物②



東大窪遺跡出土遺物③



中萩原遺跡調査区全景



5区東壁土層（西から）



8区東壁土層（西から）



1-N区～2-S区Ⅳ層上面遺構検出状況
（南東から）



1-N区～2-S区Ⅳ層上面遺構完掘状況
（南東から）



3-N区～3-S区Ⅲ層上面遺構検出状況
（南西から）



3-N区～3-S区Ⅲ層上面遺構完掘状況
（北東から）

中萩原遺跡調査状況①



3-N区～4-S区Ⅱ層遺物検出状況（北東から）



遺物出土状況①



遺物出土状況②



作業状況①



作業状況②

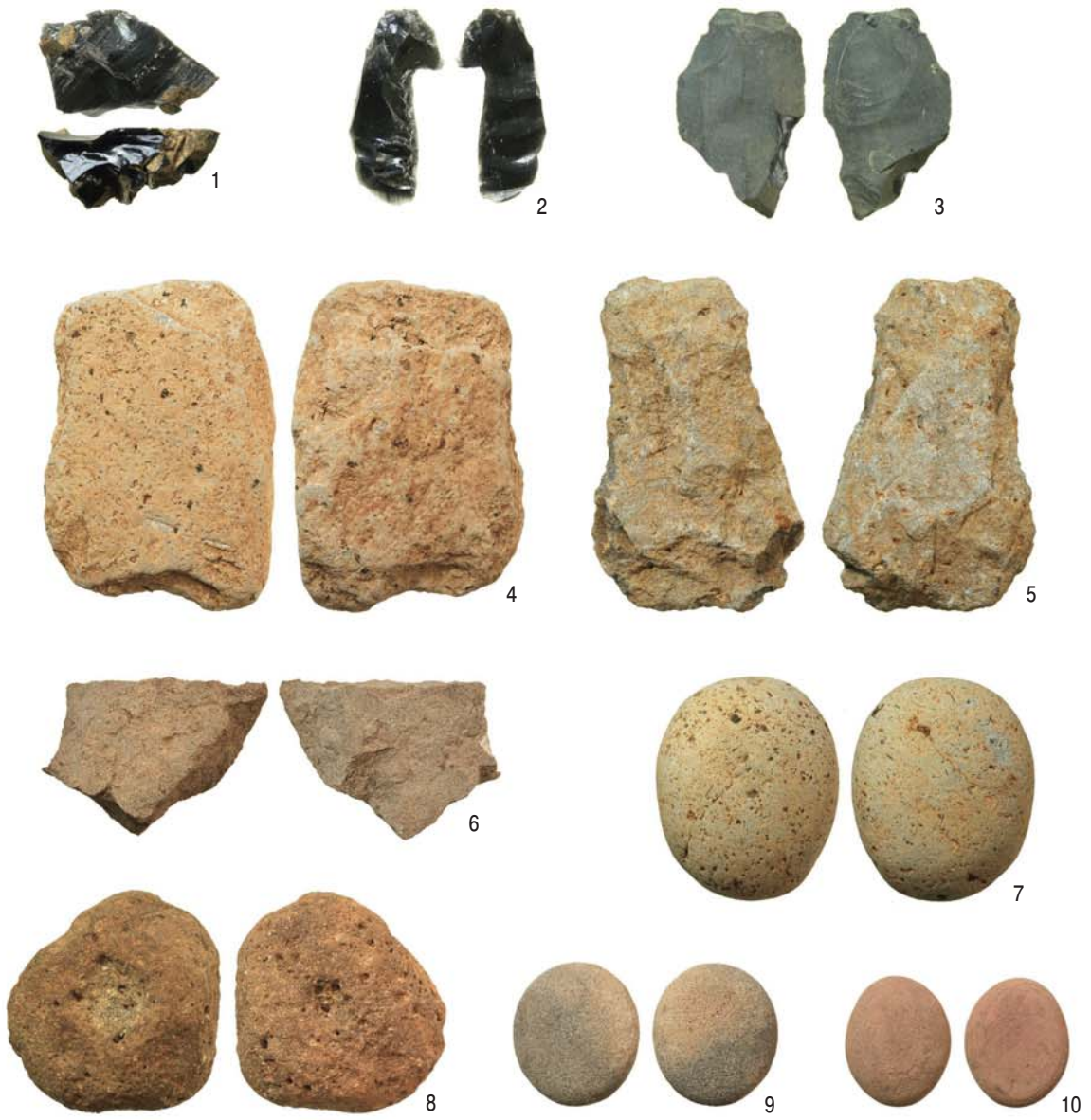
中萩原遺跡調査状況②



中萩原遺跡出土遺物①



中萩原遺跡出土遺物②



中萩原遺跡出土遺物③

報告書抄録

ふりがな	ひがしおおくほいせき なかはぎわらいせき							
書名	東大窪遺跡・中萩原遺跡							
副書名	市道堀切湯河内線道路改良工事に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	南島原市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第18集							
編著者名	本多 和典, 小川 慶晴, 竹村 南洋							
編集機関	南島原市教育委員会							
所在地	〒859-2412 長崎県南島原市南有馬町乙1023番地 TEL 0957-73-6705							
発行年月日	西暦2019年12月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〇'〃	東経 〇'〃	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひがしおおくほ 東大窪遺跡	みなみしまばらし 南島原市 ありえちよう 有家町	42214	065	32° 41' 59"	130° 18' 3"	20180522 ～ 20180817	432m ²	市道改良 工事
なかはぎわら 中萩原遺跡	みなみしまばらし 南島原市 ありえちよう 有家町	42214	066	32° 41' 54"	130° 18' 1"	20180525 ～ 20180810	200m ²	市道改良 工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
東大窪遺跡	遺物包含地	縄文時代		土坑 ピット		縄文土器(早期, 後・晩期) スクレイパー 打製石斧 砥石 敲石		
中萩原遺跡	遺物包含地	縄文時代		ピット		縄文土器(後・晩期) 打製石斧 磨石・敲石		

南島原市文化財調査報告書 第18集

東大窪遺跡・中萩原遺跡

2019. 12. 31

発行 長崎県南島原市教育委員会
〒859-2412 長崎県南島原市南有馬町乙1023番地

印刷 株式会社 昭和堂